○蘧伯玉　○昭昭　○冥冥　○信節　○惰行　○闇昧

有聲。公問夫人曰。知此爲誰。夫人曰。此蘧伯玉也。公曰。何以知之。夫人曰。妾聞。禮下公門式路馬。所以廣敬也。夫忠臣與孝子。不爲昭昭信節。不爲冥冥惰行。蘧伯玉衞之賢大夫也。仁而有智。敬於事上。此其人必不以闇昧廢禮。是以知之。公使人視之。果伯玉也。（小學、稽古明倫）（三九、陸士・四、廣島高師）

通解 衞の靈公が奥方と或る夜坐してゐると、忽ち車がカラ〳〵ときしる音がしたが、宮門まで來るとパタリと止み、又宮門前を通り越すと再び音がするのが耳に入つた。公が奥方にたづねていふに、「今の車に乘つてゐた者は誰だか分るか。」と。奥方がいふに、「これは蘧伯玉でありませう。」と。公が「何ぜそれが分るか」といふと、奥方がいふに、「わたくしが聞いて居りますのに、禮法に、「君公の門の前を通る時には車から下り、君公の御乘馬に出逢つた時には、車の前の横木に手をかけて敬意を表はす。」とあるとの事ですが、これは尊敬の意を推しひろめて君の品物にまで敬意を拂ふわけであります。いつたい忠臣と孝子とは、人の見て居る所だからとて、ことさら節を立てる事もなければ、又人が見て居らぬ所だからとて、ふしだらな行をしませんの。蘧伯玉は衞の賢明なる大夫でありまして、人情が厚くして智慧があり、主君に事へるのにつつしみ敬つてゐます。それであるから、此の人はきつと闇夜で誰も見て居らぬからとて禮儀をすてる事はしません。此の點から彼である事が分ります。」と。公が人をやつて調べさせてみると、ほんとに奥方の言つた通り伯玉であつた。

語釋 ○轔々 車のきしる音。○路馬 君の乘用する馬。路は大の義で、君の馬を敬つていつたもの。因みに「下公門」「式路馬」といふのは、禮記の曲禮にある語である。○信節 節を立てる。强ひてよい行をする。信は伸と同じ。○闇昧 くらやみ。

○斯　○卜子夏　○田子方　○段干木　○伏謁　○納履　○安往

【三一五】 魏文侯名斯。以周威烈王命爲侯。以卜子夏田子方爲師。過段干木之閭必式。四方賢士多歸之。文侯之子擊。遇子方于道。下車伏謁。子方不爲禮。擊怒曰。富貴者驕人乎。貧賤者驕人乎。子方曰。亦貧賤者驕人耳。富貴者安敢驕人。國君而驕人失其國。大夫而驕人失其家。夫士貧賤者。言不用。行不合。則納履而去耳。安往而不得貧賤哉。擊謝之。（十八史略）

通解 魏の文侯は名を斯といひ、周の威烈王の命令で侯となつた。卜子夏と田子方の二人を師と仰いだ。又賢人段干木の住んで居る里の門の前を通る時には、きつと車の前の横木に手をかけよりかかつて敬禮した。それだから四方諸國の賢い士が文侯を慕うて來る事が多かつた。文侯の子の擊は、子方に路上で出遇つて、車から下りてうつむいて丁寧に禮をして見えたところ、子方は返禮をしなかつた。すると擊は腹を立てていふに、「いつたい富貴な者が人に驕るべ

きか、貧賤の者が人に驕りたかぶるべきか。貧賤な汝が驕るのは不屑でないか。」と。子方がいふに、「勿論貧賤の者が驕るのが當然だ。富貴な者がどうして人に驕る事が出來よう。若し國君である者が人に驕つたなら、その國をなくしてしまひ、大夫である者が人に驕つたなら、其の一家をほろぼしてしまふであらう。いつたい貧賤なる我々如き士は、若し言ふ事も用ひられず行ふ事も君の意に合はないならば、その時はただ履を足に著けて、そしてその國を去つてしまふばかりである。何處に往つたとて、貧賤な地位を得られぬ事はないのである。かやうにどつちに轉んでも差支ない貧賤の者が人に驕りたかぶるのが、寧ろ當然である。」と。擊は成る程と思つて失禮を謝した。

○輪輻(リンプク)
○蓋軫(ガイシン)
○轍(ワダチ)
○不與(アツカラ)
○仆(タフル)、斃(タフル)

【三一六】輪輻蓋軫。皆有職乎車。而軾獨若無所爲者。雖然。去軾則吾未見其爲完車也。軾乎。吾懼汝之不外飾也。天下之車莫不由轍。而言車之功。轍不與焉。雖然。車仆馬斃。而患不及轍。是轍者禍福之間。轍乎。吾知免矣。

（唐宋八家文—蘇洵、名二子一說）

題解 凡そ車の輪、車のやゝほろ、車の後の横木などは、皆車を組立てるに必要なもので、それぞれ自分の役目をもつてゐる。ただ軾——車の前の横木だけは、一見役立つ所がないやうに見える。けれども若し軾が無い時は、まだ完全な車といへないと思ふのである、それ故軾よお前が内に有用の才があるのに、外にそれを表はさないために、世から疎んぜられるかと心配するのである。凡そ世の中の車で轍——車の輪の通るみち——即ちわだちに由つて通まぬものは無い。ただ車そのものの仕事からいふと、轍は何の關係も無い。けれどもたとひ車がひつくりかへりそれを曳く馬が轉びたふれても、わざはひが轍には及ばない。これから見ると轍は禍と福との間にあるものである。それ故轍よ、お前はたとひ天下有用の才となつて立派な成功をして福をうけぬまでも、きつと身の禍だけは免れるであらうと思ふ。

○識(シルス)(心ノウチニオボエテオク)

【練一四五】孔子過泰山側。有婦人哭於墓者。而哀。夫子式而聽之。使子路問之曰。子之哭也。壹似重有憂者。而曰。然。昔者吾舅死於虎。吾夫又死焉。今吾子又死焉。夫子曰。何爲不去也。曰。無苛政。夫子曰。小子識之。苛政猛於虎也。

（禮記、檀弓下）

98

措(オク、スツ、ハナツ、ユルス)。**舍**(オク、スツ、ハナツ、ユルス)。**釋**(オク、スツ、トク、ユルス)。**寘**(オク)

「オク」とよむ字にも色々あるが、措はヤメル、ステルの意で、舉措といへばフルマヒの意になる。スエオク意味があるから、措置といふ語もある。舍は捨と同義で、サシオク、ステオク意である。「弓ヲ圓(ヒ)キ矢ヲ舍(ハナ)ツ」などとハナツとなる事も、又ユルスとなる事もある。釋も舍に殆んど同樣の意で、やはり「オク」となる。釋奠(セキテン)孔子の祭のことで、オキマツリといふが、釋も奠もオクの義である。寘(置シ)もオクとよむ。トメオクの意である。よく出る字であるから、覺えておくがよろしい。

○魁岸（クワイガン）
○容、延（ヒク）
○酣暢（カンチヤウ）
○欣歡（キンクワン）
○詩賦唱酬（シフシヤウシウ）
○詞采煥發（シサイクワンパツ）

【三一七】君容貌魁岸。眼光射人。人一見服其聰明。而愛才容衆。人有寸長。推奬不措。雖在劇職。常延異能之士。酣暢談論。盡其欣歡。時或詩賦唱酬。詞采煥發。其餘事亦能使人屈服。當此時。海内之士。論人才者。必屈指於君。而聲名震天下矣。

（青山延光、藤田東湖碑）

東湖と筆蹟

通解　君（東湖を指す）は顔かたちが、すぐれて大きく逞しく、眼が鋭く光つて人を射るやうである。誰でも君を一度見れば、君の頭腦の敏い事に服してしまふ。そして君は人の才能を愛し多くの人の意見をききれ、人に少しの良い所があつてもどこまでも推しほめてやまない。非常に多忙な職務についてゐても、始終かはつた才能のある士を引き入れて、酒を飲みのびくしした氣分で談論して、そのうれしく喜ばしい心持を盡したのである。時によつては、詩や賦といふ韻を用ひた文を寄とだがひに作りかはし、美しい言葉が出てかがやくばかりであつた。かやうに君の本職でない事柄に於いても、また人を屈服させる事が出來たのである。此の頃、天下の士で、人物を論ずる者は、きつと君を第一等の人物の中に指折りかぞへたのである。そして君の評判名譽は天下に隠れもないのであつた。

自幾度顔美死鉛華生高手本
至除寂刀雄筆洋武四去恒学陽
為仲彦　甲寅秋　東湖迂人

通解　○魁岸　體格が大きくすぐれて逞しいこと。○酣暢　酒に醉ひのびくしした氣分になること。

○季氏宰（キシノサイ）
○赦（シヤ）
○爾（ジ）
○舍諸（シヤショ）
○蛟龍（カウリヨウ）

【三一八】仲弓爲季氏宰。問政。子曰。先有司。赦小過。舉賢才。曰。焉知賢才而舉之。曰。舉爾所知。爾所不知。人其舍諸。

（論語、子路）

通解　仲弓が魯國の家老季氏に仕へて、その家の取締をする役となつて、政治上の事を孔子にたづねた。孔子がいふに「主宰の職に居るからには、先づ屬吏を用ひてそれ〴〵の仕事を分掌させる事が大切である。ついて人には過のある事であるから、小さな過などは赦してやつてそのまま用ひてやるやうにし、賢い者才能のある者を推舉するやうにせよ。」と。仲弓がいふに「ただ一人の私が、どうして世の中の賢者能者を知りつくして、推舉する事が出來ませう。殆んど出來ん事と思ひますが、如何でありませう。」と。孔子がいふやう「お前の知つてゐる人物を推舉するがよい。すればお前の知つてゐない人物は、他人がなんとそれをすておく事があらう。それは他人が推舉するから心配はない。」と。

【三一九】君子愼其所立乎。積土成山。風雨興焉。積水成淵。蛟

○蹞歩
○騏驥
○駑馬

龍生焉。積善成德。神明自得。聖心備焉。故不積蹞歩。無以至千里。不積小流。無以成江海。騏驥一躍不能十歩。駑馬十駕。則亦及之。功在不舍。（荀子、勸學）

語釋 學問に志す君子は、自己の立場とか出發點とかいふものに注意するであらう。土を積んでそれが山ともなると、風や雨がそこから起つて來る。水がたまつて深い淵ともなると、そこにみづち龍が生ずる。同樣に善い事がたまつて人格が出來あがると、神のやうな聰明な性質を自分から悟るし、聖人のやうな立派な心がついて來るのである。それであるから、片足づつ進めて行かなければ、千里の遠い所に至る事は出來ぬし、小さな流の水が集まらなければ、揚子江や東海などは出來ぬ。一日に千里も走る驥馬でも、一とびでは十歩（凡そ十間）もとぶ事は出來ぬが、足の遲い鈍いやくざ馬でも、十たびもとんだならば、それに達する事が出來よう。以上述べた譬のやうに、すべて學問の成績といふものは、途中で廢する事なく、間斷なくつづける所にあらはれる。

○蹞歩 ホブダウダツ 歩武堂々

語釋 ○蛟龍 カウリヨウ みづち。○蹞歩 キホ かた足、半歩。漢文で一歩といふと兩足進める事で、凡そ一間の距離になるわけである。蹞歩は跬歩と同じである。蹞も跬も歩の半分である。ついでにいふが歩武堂々などいふ武も半歩の意である。歩武は足並をいふ。○騏驥 キキ 駿馬。足のはやい馬。騏も驥も同意。一日に千里も走る馬である。○駑馬 ドバ 足の鈍い馬。役にたたぬ馬。駑馬の才、駑鈍の才などいふ語は、人が自ら謙遜して用ひるもの。

○荆王
○謁者
○中射之士
○釋

【三二〇】有獻不死之藥於荆王者。謁者操之以入。中射之士問曰。可食乎。曰。可。因奪而食之。王大怒。使人殺中射之士。中射之士使人說王曰。臣問謁者。曰。可食。臣故食之。是臣無罪。而罪在謁者也。且客獻不死之藥。臣食之。而王殺臣。是死藥也。是客欺王也。夫殺無罪之臣。而明人之欺王也。不如釋臣。王乃不殺。（韓非子、說林上）

語釋 昔、不老不死の妙藥を荆（楚のこと）の王に奉る者があつた。取次ぎの者がその藥をしつかり手に持つて奥御殿に入つて來ると、侍從の役人が、「それを食べてもよいか」とたづれた。すると取次ぎの人は、冗談事であると思つて「食べてもよいです」と答へた。ついて侍從の役人は、それを無理に奪ひ取つて食べた。之を聞いて王は大に腹を立て、臣下に命じて侍從の役人を殺させようとした。すると侍從の役人は、人を介して王に說かせていふには、「私が取次ぎの者にたづれた時、食べてもよいと申したから、私がそれを食べたのです。つまり私には罪が無く、罪は却て取次ぎの者にあるのです。その上外來者が不死の藥と稱して獻じたのに、私がそれを食べて、そのために王樣が私を殺すのでは、これは不死の藥どころか、人を殺す藥となるのである。これでは外來者が王樣にいつはりを申した事になります。いつたい罪無き私を殺

して、折角藥を獻じたその者に、王様をあざむいたといふ汚名を着せるよりは、此の私をお許しなされる方がよいでせう。」と。王はそこで侍從の申立てに道理があると思つて殺さなかつた。

注釋 ○謁者（エツシヤ）　取次ぎをする人。應接の役人。○中射之士（チユウシヤノシ）　侍御の役人。戰國時代諸侯の朝で、宮中の宿衛をした士。

【練一四六】狄生徂徠。看書向暮。則出就簷際。簷際亦不可辨字。則入對齋中燈火。故自旦及深夜。手無釋卷之時。其平生惜分陰者。率此類也。（先哲叢談、卷六）

【練一四七】孟子曰。仁人心也。義人路也。舍其路而弗由。放其心而不知求。哀哉。人有雞犬放。則知求之。有放心而不知求。學問之道無他。求其放心而已矣。（孟子、告子上）

○簷際（エンサイ）（ノキギハノキバタ、簷先）
○病羸（ビヤウルイ）
○効（イタス）（效ノ俗字）
○遭（アフ）
○庸陋（ヨウロウ）
○犬放（ハウ）ノ放ハ「ヘナルトヨウンデモヨイ。マヨヒ去ル意放逸ノ意デアル。

99

負。倍。乖。畔。

「ソムク」と訓ずる文字で、背、叛、反などは知らぬ者は無いが、上にかかげた諸字に至ると、案外よめぬ人が多い。負は思にソムク、ノ然マ意レル。倍は背と音も意も相通じて、向の反對で、裏腹ニナル。乖（音クワイ）はモトル（戾）、サカラフ、畔に叛と音も意も同じで、離叛スルといふ意である。常に出る字であるから、いづれも覺えておかねばならぬ。

【三二一】襄也病羸。不能効力父母之邦。況敢望有益於世。然生遭此極盛之運。以其庸陋之筆墨。裨補萬一焉。則不負爲

○載（ムカフ）
○鄉利（ソムク）
○倍義（ソムク）
○劃生（ソムク）
○竊（ヒソカニ）

太平之民也。（頼山陽、上樂翁公書）

通解 此の私、襄は山陽の名）は病弱な身で、既に鄉國の藩侯に仕へて骨を折るといふ事さへ出來なかつたのであるから、まして、なんとして進んで世に貢獻するなどといふ事が望まれませうや。けれども、わくらばに人と生れて、勢威の隆々たるめでたい世に出遭つたのであるから、せめて自分の拙い文章によつてでも、盛代の萬が一つの闕けめでも補ひたすける事が出來たならば、始めて太平の世の惠みを蒙る民として、爲すべき道にそむかない――即ち當務を盡した事になるのであります。

注意 ○況があつても、ここではチヤで結ばないでよい。(29)で說いた通り、況の下に「豈」などの反語の形が來る時には、チヤと結ぶ邊がないのである。然るに敢はその上に豈が略された形であつて、反語になつてゐる。又反語の敢に不レ得の意が含まれてゐる事は、(38)にも說いた通りである。序にいふが譯文に「わくらばに」といふ語を使つたが、之はタマサカニ、タマタマの意の語である。「わくらばに人と生れて」の歌から聯想して、試みに用ひたのである。

【三二二】韓信曰。漢王遇我甚厚。載我以其車。衣我以其衣。食我以其食。吾聞之。乘人之車者。載人之患。衣人之衣者。懷人之憂。食人之食者。死人之事。吾豈可以鄉利倍義乎。劃生曰。足下自以爲善漢王。欲建萬世之業。臣竊以爲誤矣。

（史記、淮陰侯列傳）

萬世之業ニツイテハ、「二五ノ「千萬年之業」ヲ參照セヨ。

○雍熙（ヨウキ）
○邊徼（ヘンケウ）
○懵乎（ボウコ）
○宜（ウベ）
○間關（カンクワン）
○彌留（ビリウ）

通解 韓信がいふには、「漢王は自分を非常に手厚く待遇してくれた。即ち自分を王自身の車に席を分けて載せてくれ、王自身の召物を割愛して着せてくれ、王自身の食物を分けてくれた程である。自分が曾て聞いた所では、人の車に同乘した者は、その人の患難を分けて共々にその患難に當られねばならぬし、人の衣物を着る者は、その人の心配事を分けて、己れの心配事のやうに思はねばならぬし、人から食物を與へられた者は、その人のために身命を捨てても盡さねばならぬといふ事である。蓋し人の恩義は忘れてはならぬといふ事であらう。故に自分は今何として自分の利益になる方に向つて、漢王の恩義に背くといふ事が出來ようぞ。」と。之を聞いて制生（名は通）がいふには「貴下は御自身で勝手に漢王を伸が善いと思つて、漢王のために盡して、それで萬世にわたる子孫帝王の大業を建てようとなされます。しかし、私はひそかにそれを誤つた御考だと思つてゐます。」と。

【三二三】 余家出自皇族。世際雍熙。所習止朝儀典章。至兵革邊徼之務。則懵乎無辨。宜其措置乖方。不足服人心也。願身爲前朝遺老。奉今上于間關。受顧命于彌留。故據孤城。以抗強敵耳。（澁谷林山、北畠親房關城書）

通解 私の家はもと皇族から分れ出たもので、たまたま世の中が和らぎたのしむ平和な時に當り、學んだ事は朝廷の儀式や制度文物の事だけで、いくさの事や邊土の警を守る事になれば暗くてまるつきり分らない。だから、その處置がその道にそむいてゐて、民心を服する事が出來なかつた事は、尤な事である。ただ考へてみるに、私の身は先帝（後醍醐）の御代に仕へた老臣として、今上（後村上）を艱難な際にいただき、先帝の御遺命を御危篤の際に拜受したのである。それであるから、斯樣に孤立無援の城にたてこもつて、强大なる敵軍に抵抗してゐるのである。

語釋 ○雍熙（ヨウキ） やはらぎたのしむこと。平和なめでたい代をいふのである。○典章（テンシヤウ） 制度文物。○兵革（ヘイカク） いくさ。兵は武器、革は鎧冑などをいふ。○邊徼（ヘンケウ） 國土の片ほとりにあるとりでで徼はとりでの意。國境を守備する城壘。邊塞（ヘンサイ）と同意。○方（ハウ） 道の意。○間關（カンクワン） 山路がけはしく行きなやむさま。艱難な時をいふ。一九九頁の間關踏頓を見よ。○顧命（コメイ） 臨終の時遺言すること。周の成王が崩ずるとき、羣臣に遺命した故事による。書經に出てゐる語である。○彌留（ビリウ） 大病。危篤。彌は「やや」の意で、なほ多少生命が殘つてゐる程の大病である。

【三二四】 子曰。君子博學於文。約之以禮。亦可以弗畔矣夫。（論語、雍也）

通解 孔子がいふやう、「學問に志す人が、若し博く古人の書物――詩書六經の文を學び、更に禮儀を以て身を節制し――即ち博く學ぶばかりでなく、散漫にならぬやう、學習した所を統制し、括りをつけて、身によく實行して行く――といふやうにするならば、まづそれで道にそむかぬやうになれるであらうか。」と。

○弗畔（フツハン）

博文約禮

○拊循（ナデヤスンズル、テナヅケル）
○鋤麑
○矯拂
○待
○猜忍刻厲

【練一四八】諸將問韓信。兵法。右倍山陵。前左水澤。今者將軍令臣等反背水陳。曰。破趙會食。臣等不服。然竟以勝。此何術也。信曰。此在兵法。顧諸君不察耳。兵法不曰。陷之死地而後生。置之亡地而後存。且信非得素拊循士大夫也。此所謂驅市人而戰之。其勢非置之死地。使人人自爲戰。今予之生地。皆走。寧尚可得而用之乎。諸將皆服。曰。善。非臣所及也。（史記、淮陰侯列傳）（一四、東京師）

100

持。執。秉。攬

○ばヂスとよみ、把持の語があるやうに、ニギル、手ニ取リモツ意に使ふことも、常のことだが、漢文では、持ニ志といふやうに、カタクトル、タモツの意となり、持續の語のやうに、モチコタヘル意になることが多い。自持といへば、ミヅカラ身ヲタモル、身ヲタモツの意である。執は執拗と熟し、カタクトル意。秉（音ヘイ）はトリマモル意、秉ニ燭、秉ニ至公ニなどと使ふ。攬は手ニテアツメトル、又ワガ身ノ方ニ引キツケル意がある。總攬、收攬などと使ふ。

【三二五】定數百年分裂之世。如治盤根錯節。必以鋤麑斬斷見功。其間必有大矯拂人心者。而取之甚難者。持之必太急。待將帥。御臣民。不能無猜忍刻厲之病。日本外史、織田氏）

通解　群雄が割據して、數百年間天下が諸地方に分れて亂れてゐた世の中を平定する事は、ちやうどわだかまつた木の根や、入り交つた木の節を切るやうに困難な仕事である。從つてきつと、根だやしにすき取り切りすてて始めてその功を奏するのである。それを根だやしにするまでの間は、必然的に世間の人の心を矯め直したり、從つて人心にもわり逆つたりする事が大いにあるのである。そして天下を取るのにたいへんに困難する者（たとへば織田氏のやうな人、之に反して秀吉などはたやすく天下を取つたのである）は、此の徹底的に根だやしにするといふ遣口を保つて行く事が、きつと非常に急激である。故に部下の諸將を待遇するにも、臣民を引きまはすにも、自然、それむとか、辛く相手に當るとか、冷酷にはげしくするといふやうな缺點を免かれる事が出來ない。

○盤根錯節＝物事の困難な場面をたとへていふ語。九八頁に出て居る。（鋤麑斬斷）

語釋　すきたふし切りたつ、根だやしにしてしまふ。麑は獸と同じで、たふす、くじくなどの意。○矯拂　矯は曲つてゐるものをため正す、拂はもとり逆ふ意。○猜忍　人をそねみ人に辛くあたること。○刻厲　きびしくはげしく人に對すること。

○救焚
○拯溺
○卯角
○臺鼎
○鈎軸

秉＝鈎軸ニハ秉ト鈎ト同ジ。

【三二六】公之爭新法。痛擊不遺餘力。公之改弊政。如救焚拯溺。人皆疑其不類平生。然公之仁勇。既於卯角之日見之。何必待登台鼎秉鈎軸。而後知之耶。（齋藤拙堂、題司馬溫公擊瓠圖）

通解　公（司馬溫公）が王安石の新法令を不可であるとして、之を論爭した時には、手痛く攻擊して、餘力を遺さぬ——遺憾なきまでに力一ぱい攻擊した。公が弊害のある新法の政治を改革した時には、まるで火に燒けようとする者を救ひ、溺れようとする者を助ける程に、急速にしたのである。從つて世の人は誰も皆、それが公の平生の溫厚な樣子とちがふのを不審に思つ

てゐる。けれども、公の仁と勇の二德を具へてゐた事は、既にあげまき即ち子供の時代に於いて見られるのである。何もさう大臣の高位に昇つて、天下の政權を握ぎるやうになつて始めて分る事ではあるまい。

語釋　○丱角　あげまき、子供。子供が髮を二つに分けて頭の左右にあげてまいて居るさま。總角と同じ。○台鼎　台は三台星といつて三星の名、鼎は足の三本あるカナへ鍋、いづれも三公にたとへる。大臣の意。○鈞軸　天下の政治をいふ、政權。鈞は陶器をつくる器械に附いてゐる輪で、物事の樞機の意。軸は心棒である。

【三二七】早雲嘗召儒士。説黄石公三略。其首言曰。主將之法。務攬英雄之心。早雲聞之曰。止矣。吾既得之矣。不復使説。嗚呼。有以夫。其以流寓漂泊之人據有八州。以開五世之基也。

（日本外史、後北條氏）

通解　北條早雲が或る時儒者を召して、黄石公が張良に傳へたといはれてゐる三略（上中下）といふ兵法の書を説明させた。するとその書の劈頭第一に、「總大將たる者の守るべき事は、務めて精々部下の英雄どもの心を引きつけるといふ事である。」と言うてある。それを儒者がいふと、早雲がいふには「説くことを止めよ。その事なら自分はもはや爲し得たのである。」と。さういつて二度とその書を説かせなかつた。さて〳〵、彼が諸國をさすらひ歩いた浪人の身として、よく關東八箇國を領有して、子孫五世に傳はつた事業の土臺を開いたといふ事は、わけのある事であるわい。

注意　○主將之法務攬英雄之心は、三略のうち上略の開卷第一に出てゐる語である。

【練一四九】先生爲人瓌瑰。體高眉蹙。眼采炯々。望之有威。性峻峭。不能包容尋常之人。常慨昇平日久。士氣不振。故以氣節自持。亦以導人。未嘗屈己隨人浮沈求容。（江木鰐水、山陽先生行狀）

【練一五〇】素行幼穎悟。好讀書。執贄于羅山林先生。講説小學論語。辭理明暢。驚老成人。年十二。許用見臺。見臺近世講筵。用以代机案者。總角以是講經。人以爲奇才。（鹽谷簣山、山鹿素行傳）

○瓌瑰（ヤセテヨワルコト）
○體（ホホボネ）
○執贄（弟子入リスル、贄ハニヘ、弟子入リスル時ニ師ニオクル禮物）
○總角（アゲマキ、子供）
○枉（アダ）
○臭（シウ）
○須臾（スシユユ）

101

貽遺諼

【三二八】人生百年均之皆死也。而自古學士大夫。遭遇時變。往往至枉道辱身。以貽臭千載。豈非以其貪須臾之命邪。

（安井息軒、讀書餘滴）（二、萬曆）

貽（イ）はノコスとよく、人のためにならやうに物ヲノコス意がある。オクルとよむ事もある。よく出る字である。遺は形見ニノコス意。オクルとよみ、オクリツケル意となり、又ワスルともよむ。諼（ケン）はワスルとよみ、諠と同じく忘却の意となる。ノコスといふ訓はないが、遺をあげた序に記しておく。

○夫人（タイフジン）
○爲（ツクル）（ヲ）
○遺（オクル）
○擢（ヌキンヅ）

渚ヲ「ワスル」トヨム例ハ、（一五四）（一七七頁）ニ出テキル。

通解　人の生命はおほまかに見ても百年までであるが、誰にも平等に存する事實は、一度は死なねばならぬといふ事である。然るに昔から學問知識のある人や、身分の高い人が、世の驅動に出會つた時、兎角己の信ずる道をまげ屈して道ならぬ事に味方し、その結果が身を辱しめ卑屈な事をして、それで惡い醜い名を後の世まで長く殘すやうになる。それはなんと其の人が所詮長くもないかりそめの間の生命を惜しみ貪つたためではないか。

【三二九】公在天聖中。居太夫人憂。則已有憂天下致太平之意。故爲萬言書。以遺宰相。天下傳誦。至用爲將。擢爲執政。考其平生所爲。無出此書者。（唐宋八家文―蘇軾、范文正公文集序）

通解　公（范仲淹）は天聖年間に於いて、母君を失つてその喪に服してゐた頃、已にはや天下の事を心配して太平の世にしたいといふ懷を抱いてゐた。それだから長文の書を作つて時の執政（大臣）の許におくり屆けたのである。それを世の人が皆それからそれへと傳へて誦讀してゐる。その後公が用ひられて大將となり、又拔擢されて政を執る大臣となつてから、そのふだん爲した行動をよく考へて見ると、前に大臣におくつた所の書物に書いてある事以外にわたる事は無かつた――それ程その書物の中に早くも天下の事を規畫したのであつた。

【練一五一】君子篤於親。則民興於仁。故舊不遺。則民不偷。（論語、泰伯）

【練一五二】如會德（二宮氏）所爲。雖事屬既往。宸衷嘉尚。至今弗諼。

規（キ）はハカルとよみ、又タダス、イサムとよむ。規て規矩の規で、ブンマハシ、コンパスの意がもとで、――則のごとくキマリの意となり、――略のごとくハカル意となり、又――諫のごとくタダス、イサムといふ意にもなつてゐるのである。

（川田甕江、報德記序）

○善容（ヨクイル）
○駈修（クヒヨウシン）
○稼穡（カシヨク）（イウデン）
○遊畋（カウオ）
○巧佞

【三三〇】東照公。爲人沈毅有大略。用兵如神。而好學求治。愛人善容。處事必規百世之後。自執儉約。不敢驕侈。最重稼穡之事。雖至微細。無不諳知。屢託遊畋。以訪疾苦。其爲政。務養士氣。開言路。防巧佞浮華之習。（日本外史、德川氏）

通解　東照公は人柄が落ちついてしつかりしてゐて、非凡なかんがへをもつてゐた。軍隊を動かす事は凡人に分らぬ程速く巧みであつた。そして學問を好み平和な政治を求め、人を愛して親切に人の言ふ事を聽き入れる雅量があつた。物事を處理するには、きつと永い後の世までの事をはかり考へた。自らかたく儉約を守つて、決しておごるといふ事をしなかつた。いちばん植ゑつけと取り入れ――即ち農業上の事を重んじて、その極めて細かな事であつても、皆殘らずそらんじてゐた。たび〳〵遊獵するのだといつて、人民の難儀してゐるのを訪ひ慰めた。その政治を施すには、務めて士の元氣を養ひ、士どもに建言する事が出來るやうにしてやり、

(102) 規(タダス イサム)

巧みにお上手をいつたり、上調子で華美にしたりする悪習に染まぬやうに注意した。

語釋 ○稼穡(カシヨク) 稼は植ゑ付け、穡は取り入れ。農事のこと。○遊畋(イウデン) 諸處を獵してあるくこと。遊佃も同じ。

【三三一】聖人之道。入乎耳。存乎心。蘊之爲德行。行之爲事業。彼以文辭而已者陋矣。仲由喜聞過。令名無窮焉。今人有過。不喜人規。如護疾而忌醫。寧滅其身而無悟也。噫。

(小學、嘉言廣ニ敬身ニ)

○蘊(フム)之
○陋(イヤシ)矣
○噫(アア)
○規(イサム)ハ「タダス」トヨンデモヨイ。

通解 聖人の道――孔子が說いた所の仁義中正の道は、人の耳から入つて心にとどまり、少しも不用のものがなく、それを身につみゆけば立派な行爲となり、それを實行すれば事業となつて、皆世を益するのである。然るにかの文章辭句を飾るだけの者は、人の耳目を喜ばすけれど、道に本づいて居らぬから、世に益なくその志がいやしく低級である。孔子の弟子の仲由(字は子路)は、自分の過失を人から言はれる事を喜んだが、果してそのよい名聲がいつまでも傳へられてゐる。然るに今日の人は身に過失があると、人が諫めただしてくれる事を喜ばない。これは恰かも身に疾病がある時、疾病そのものを保護して、療治する事を嫌ふやうなもので、たとひその身自體を滅すやうになつても、悟る事がないのである。さて〳〵なげかはしいこと、だ。

注意 ○護レ疾而忌レ醫は成語となつてゐるが、この護を「忌ンデ」とよむ人もあるが、それでは通じない。護はまもる、それが他の物に害せられぬやうにおほひかくして守る意である。疾そのものに味方してゐるのである。その意でないと「如」の用法にそはぬ。且つ疾は過をたとへたので、疾を忌む位なら――過を忌む位なら結構なことで、その位の人なら人から諫められても却て喜ぶであらう。これらの點からこの護は「マモル」とよんで差支ないと思ふ。ただ護レ疾といふ語自身が奇矯な語だから、音で「ゴシテ」とよんでもよからう。念のため記しておく。

【練一五三】藍田呂氏鄉約曰。凡同約者。德業相勸。過失相規。禮俗相交。患難相恤。有善則書于籍。有過若違約者亦書之。三犯而行罰。不悛者絕之。

(小學、嘉言廣ニ敬身ニ)

○悛(アラタム)

○挾(ハサム)(サシハサム)
○孟獻子(マウケンシ)(人名)
○樂正裘(ガクセイ・キウ)(人名)

103

挾(ハサム) サシハサム ワキバサム

○挾(ゲフ)は物と物の間にサシハサム意。ワキバサムともよんで、コワキニ抱ヘル意となる。故に普通の意味では格別の事はないが、次の諸例のやうに、物品をハサム意でなく、無形の物をハサム意に用ひる事が多いのである。此の時は自分のうちにある何かを恃んで、相手にへだてをおき、自らたかぶる意である。

【三三二】萬章問曰。敢問友。孟子曰。不挾長。不挾貴。不挾兄弟而友。友也者。友其德也。不可以有挾也。孟獻子百乘之家也。有友五人焉。樂正裘・牧仲。其三人則予忘之矣。獻子之與

(103) 挾(サハム サシハサム ワキバサム)

○牧仲（人名）
○予

○披瀝
○乖忤
○娼疾

（103）挾

此五人者友也。無獻子之家者也。此五人者。亦有獻子之家。則不與之友矣。（孟子、萬章下）

通解 萬章がたづねていふに、「憚りながら、朋友に交る道をおたづねします。」と。孟子がいふには、「年上であることを心にはさみ置かず、身分の貴いことをはさみ恃まず、兄弟にえらい（富貴な）者が居るからとてそれを念頭におかずして、それで友に交るべきである。友といふものは、その人の德――人格を友として、互に修養の助にするものなのである。決して心のうちに挾み恃む所があつてはならないのである。孟獻子は兵車百乘を出し得る大夫（魯國の）の家柄であるが、五人の友があつた。一人は樂正裘、一人は牧仲であるが、他の三人の名前は自分は忘れた。獻子が此の五人と友たるを得たのは、己れの家の貴いことを忘れて、つきあつたからである。此の五人も亦獻子の家の貴いことを心において、媚びへつらふやうな事があれば、それこそ獻子と友たる事が出來なかつたであらう。」と。

【三三三】 處ニ寮友一。須能披瀝肝膽。視如同胞。雖不可面從。而亦不可乖忤。有所挾不可。有所媚疾最不可。（言志晩錄）

通解 同役の友とつきあふには、ぜひよく眞心をひらきあらはして少しも隔てをおかず、兄弟のやうに思つて親しくつきあふ事が大切である。目前だけ從ひへつらつて後で彼是と惡口をいふのは惡いけれども、さうかといづて徒らに相手にそむきさからうても宜しくない。偏して一方にかたをもつといふ所があるのは惡いし、何か心のうちに恃みはさむ所があつてたかぶるのも惡い。相手をそれみ憎む所があるのは、わけていちばん宜しくない。

語解 ○僚友 僚は同役のもの、朋輩にいふ。○披ニ瀝肝膽一 眞心をうちあける。心の奥までさらけ出す。序であるが肝膽相照といふのは、心の底から深く契る意である。○面從 即ち面從後言のことで、その人の前ではへつらひ從つてゐるが、かげでは惡口をいふ意。○乖忤 そむき逆ふ。○黨 偏する。一方にかたをもつ。不公平にする。君子不レ偏不レ黨の語がある。○娼疾 娼嫉と同じ、それみにくむ。

【練一五四】 理到之言。人不レ得レ不レ服。然其言有レ所レ激則不レ服。有レ所レ强則不レ服。有レ所レ挾則不レ服。有レ所レ便則不レ服。凡理到而人不レ服。君子必自反。我服而後人服之。（言志錄）

【練一五五】 今州域粗定。兵强士附。西迎大駕。即宮鄴都。挾天子而令諸侯。吾士馬以討不庭。誰能禦之。（資治通鑑）

○乖忤ノ乖ハ「ソムク」デ、（99）ニ出デキル

○粗

（104）信ノブ、申カサヌ

信 ノブ。**申** カサヌ。

信はマコトニ、シンズといふ外、ノブといふ訓があることを忘れてはならぬ。信をノブといふ時は、伸と同じで、屈の反對で、屈シテキタモノガノビルといふ意を含んでゐる。申は伸と同じである。又申盟だの申嚴だといふ時はカサヌ（重）といふ訓になる。

○如セシ
○不メシカ若レ
○惡ニクムレ之

【三三四】 孟子曰。今有ル無名之指。屈而不ル信。非ル疾痛害ル事也。如シ有ル能ブルヲ信レ之者。則チ不ル遠シトセ秦楚之路。爲ニ指之不ルガカ若ル人也。指不ル若ル人。則チ知ルレ惡ムコトヲ之。心不ルハカ若ル人。則チ不ル知ラ惡ムコトヲ。此之レ謂フ不ル知ラ類ト也。

（孟子、告子上）（三五、高綬・一〇、明治專門）

○腰不レ及ニ馬腹一

通釈 孟子がいふやう「今ここに藥指がかがんで伸びず、かたはになつてゐる人があるとする。それがツキ〳〵と痛んで仕事をする妨げとなるといふわけではないのである。それでも、若しよくそれをもとのやうに伸す事が出來る名醫があるならば、それこそ秦や楚のやうに遠い國でも、千里を遠しとせず、遠路を厭はず行つて治療してもらふであらう。それは己の指が人並でないからである。かやうに人は、たとひ藥指のやうなものでも、己の指が人に及ばないと、それを羞ぢ厭ふことを知つてゐる。けれども大事な己の心が人より劣つてゐる事になると、羞ぢ惡むことを知らない。これがこれどちらが輕いか惡いかといふ——物の輕重比較を知らないといふものである。

注意 ○無名之指は日本では俗に藥指といつてゐる。第四指のことで、比較的用の無いものである。從つて之は輕い方で、重い方の心に對してあげたのである。○秦楚之路 秦は西方、楚は南西にある遠い國である。（孟子がゐた山東の方面から見て）。秦や楚に行くのは餘程の遠路であるから、殆んど交渉もない遠い處のたとひによく言はれてゐる。「邈若ニ胡與ニ秦」などといふ句もある。序であるが「長鞭不レ及ニ馬腹一」といふ諺がある。鞭が長くても馬の腹までは屆かぬといふ譬から、あまり懸隔してゐる土地ではどうするにも力が及ばぬ意に使つてゐる。

○閔閔焉ビンビンエン
○虛ムナシ
○持滿ノ之末スエ

【三三五】 古之人。其才非ルニ有ルニ大過ニ今之人ニ也。其平居所以自養而不ニ敢カロシテ輕ヒ用一。以テ待ツ其成ルヲ者。閔閔焉如ニ嬰兒之望ムガ長ルヲ也。弱者養ヒテ之以テ至ニ於剛一。虛者養ヒテ之以テ至ニ於充一。三十而後仕。五十而後爵。信於久シクスル屈之中一。而用ヒテ於既ニ足之後一。流シテ於既ニ溢之餘一。而發ス於持滿之末一。此レ古之君子ノ所ニ以シテ大過ニ人一。而今之君子ノ所ニ以シテ不ル及ル也。

（唐宋八家文—蘇軾、稼說送ニ張琥一）

通釈 昔の人は、その才智が別に今の人より大いにあつたといふわけではないのである。しかし、その平生に於いて、自ら才智を養うてゐても決して輕々しくそれを用ひないで、その大成するのを待つてゐるのは、ちやうど心もとなく氣がかりに思ひながら、みどりご——幼兒が成長するのを待つやうな態度である。かうして弱い者は氣力を養つて剛くなり、實力の無い者はそれを養つて充實させる。三十歲になつて始めて仕官し、五十歲で始めて爵位を受けるやうにする。かうして久しく屈してゐた中から頭をもたげて伸びあがり、もはや內に十分つんで不足がない時に於いてその才智を用ひる。又もはやあふれるばかりになつたその餘に流してやり一ぱいに引きしぼつて少しもゆるみがないやうになつたはてに徐ろに放つといふやうにする。

○藺相如（リンシャウジョ）
○怯懦（ケツダ）
○信（ノブ）

（104）信（ノブ）、申（カサヌ）

此の點が昔の人が今の人より大いに優つてゐたわけであつて、今の人が劣つてゐるわけである。

語釋　○閔閔焉（ビンビンエン）　憂ふるさま。どうかどうかと心もとなく思つてゐるさま。○持滿之末（ヂマンノスエ）　弓を引く時、もう一ぱいに引きしぼつて、今放すか今放すかと思はれるのになか〳〵放たず、時が十分に來た時、始めてしづかに放つやうにする義である。十分に引きしぼつてからの意。

【三三六】　太史公曰。知死必勇。非死者難也。處死者難。方藺相如引璧睨柱。及叱秦王左右。勢不過誅。然士或怯懦而不敢發。相如一奮其氣。威信敵國。退而讓頗。名重太山。其處智勇。可謂兼之矣。（史記、藺相如列傳）

通解　太史公司馬遷が論贊していふやう、「自分の死を覺悟する者はきつと勇者である。別に死ぬ事がむづかしいのでなく、死に直面した時如何にするかといふ事がむづかしいのである。藺相如が和氏の璧を手に引き取つて、秦の王宮の柱を見つめて、それに打ちあてて碎かうとし又秦王の近侍の人々を叱りつけた時には、殺される事は免かれがたい形勢であつた。ああした時、普通の士であれば、その場に臨んで氣が臆して、思ひ切つて藺相如のやうにやつてのける事が出來ないかも知れないが、それを相如は一たびその勇氣を奮つて、威光を敵國にのべ發揚したのである。又趙に歸つてからは、謙遜して廉頗將軍の下手に出たが、却つてそのため彼の名聲は泰山よりも高く、人から敬重された。その智（頗に讓る方）と勇（秦王の左右を叱した方）

蘇東坡自筆後赤壁賦

蘇子愀然。正襟危坐。而問客曰。何爲其然也。客曰。月明星稀。烏鵲南飛。此曹孟德之詩乎。西望夏口。東望武昌。山川相繆。鬱乎蒼蒼。此非曹孟德之困於周郎者乎。方其破荊州。下江陵。順流而東也。舳艫千里。旌旗蔽空。釃酒臨江。橫槊賦詩。固一世之雄也。而今安在哉。況吾與子。漁樵於江渚之上。侶魚蝦而友麋鹿。駕一葉之扁舟。舉匏尊以相屬。寄蜉蝣於天地。渺滄海之一粟。哀吾生之須臾。羨長江之無窮。挾飛仙以遨遊。抱明月而長終。知不可乎驟得。託遺響於悲風。

壬戌之秋。七月既望。蘇軾書。

○公（清正公）
○斂レ跡
○屋（祠ヲオホヒカクス、ヲガムコトガ出来ヌヤウニスル）

○禹
○大舜
○大焉
○耕稼陶漁

取於人云々ノ例（三〇七）ニモアル。

とに於いて、両方を兼ね備へたものといふことが出来る。」と。

【練一五六】蓋公操二至剛之徳一。出レ之以レ柔。是以勇者不二敢怒一。智者不二敢謀一。浩然申二於萬物之上一。嗚呼。使二公不一死。姦竪斂レ跡。而又能折二衝於千里一。天命雖レ有レ歸。豐臣氏之祠。未二必遽屋一也。而天奪二之年一。豈不レ惜哉。（安井息軒、錦山神祠改建記）

105 取二於人一。私淑二諸人一。

取二於人一は人の善い所を取って用ひる、又は善い所を取って、それを手本としわが身に善を行ふ意である。私淑二諸人一、略して私淑といふ方は、直接その人についてその人の善い所を取るのでなく、古人や先輩などの善い所をひそかに手本としてわが身の行をよくする意である。

【三三七】孟子曰。子路人告レ之以レ有レ過則喜。禹聞二善言一則拜。大舜有レ大焉。善與レ人同。舍レ己從レ人。樂取二於人一以爲レ善。自二耕稼陶漁一。以至レ爲レ帝。無レ非取二於人一者。取二諸人一以爲レ善。是與レ人爲レ善者也。故君子莫大二乎與レ人爲レ善。（孟子、公孫丑上）

通解 孟子がいふやう、「子路は人が自分のあやまちを忠告してくれると喜んだ。禹はわが身のためになる善い言葉を聞くと、有難く思って感謝した。かの大舜の如きはそれらよりまだ大きなえらい所があつた。即ち天下公共のものたるべき善い事を自分ひとり私する事なく、天下

（105）取二於人一、私淑二諸人一

の人と共にし、人に善があれば直に己をすてて人に從ひ、人から善い所を取つてわが身にそれを行ふ事を樂しんだ。彼が歴山でたがやし、河濱で陶器を造り、雷澤で漁した時から、つひに帝となるに至るまで、すべて人から善い所を取つたのでないものはない。いつたい人を手本にして善を爲すといふことは、つまり是れは人と共に善を爲すものである。それ故在位の君子たる者に取つて、人と一緒に善を爲すより大なる事はない。」と。

○虞舜
○符節

【三三八】昔者。孟軻述ニ虞舜之德一曰。樂ニ取於人一。以爲ニ善。自ニ耕稼陶漁一。以至ニ於爲ニ帝。無ニ非取ニ於人一者。嗚呼。神州之與ニ西土一。絶海殊域。帝之於ニ虞舜一。隔世異代。而其取ニ於人一爲ニ善之美。若合ニ符節一。抑、亦所謂先聖後聖。其揆一也者。其斯之謂歟。

（藤田東湖、取レ長補レ短）

通解 むかし、孟子は舜（虞はその姓）の德を述べていふには、「舜は人の善言善行を取つてそれを身に行ふことを樂しんで、耕作したり陶器を造つたり漁をしたりした微賤の時から天子となるまで、人を手本として善を爲したのでない事はない――すべて皆舜が爲した善事は、人を手本としたものであつた。」と。ああ、日本は支那から見れば遠く海を隔てた外國であり、又帝（應仁帝）は虞舜から見ると、遠く世を隔て、居り時代を異にしてゐる。然るにその人の善事を取つて身に實行するといふ美事に至つては、兩者が割符を合はせたやうに期せずしてピタリと一致してゐる。いつたいそれも亦孟子が謂ふ所の「昔の聖人と彼の世の聖人と、その道を一にしてゐる。」といふのは、まあ之をしも謂ふのであらうか。

○私
○黜
○隱
○廣詢
○陰秘壓抑

注釋 ○虞舜の虞は舜の姓である。唐堯虞舜――唐虞と合せて覺えておくがよい。○神州之與ニ西土一は(79)を參照するがよい。○合ニ符節一は割符を合はせたやうに期せずしてピタリと一致することをいふ。人の顏の似たのなら瓜二つといふ言葉もあるが、それとはちがふ。人の言行についていふのである。先聖云々と同じく孟子に出てゐる。○先聖後聖云々は孟子の離婁下篇に出てゐる語である。太平記の「正成兵庫下向」の條にも「彼は異國の良弼、これは吾朝の忠臣時千載を隔つといへども、前聖後聖一揆にして、ありがたかりし賢佐なり。」といふ文がある。孟子の先聖後聖は舜と文王を指してゐる。

【三三九】夫國家之事。成ニ於公一。而敗ニ於私一。盛乎顯一。而衰乎隱一。故其興必取善於人一。博問廣詢者也。其亡必陰秘壓抑。弄權飾非者也。考ニ之各國史乘一。其跡歴歴可レ徵矣。（問題集）（一五、高校）

通解 いつたい國家經營の事業は、公平にする所に成就し、不公平にして私する所に失敗し何事もあらはにして公明正大にすれば盛になり、包み隱して民を愚にすると衰へる。それ故に國家が興るのは、その君主がきつと善い事を人から取つてそれを行ひ、博く何事にもわたつて不審な點をたづれ聞き、又廣く天下の人々に相談して物事をした者である。之に反して國家の亡びるのは、その君主がきつと物事を内所にし秘密にし下々の者をおさへつけ、權力をむやみ

○川瀆（セントク）　○涓流（ケンリウ）　○謙虛（ケンキヨ）　○卑遜（ヒソン）　○自盈（ミヅカラミツ）　○喪（ウシナフ）　○損（ソコナフ）

に振りまはし、おのれの惡い所をつくろひ飾つてあやまちの上塗りをした者である。之を各國の歷史について考へて見ると、その形跡がアリアリと手に取るやうで、よくそれが證せられる。

注意 ○廣詢の詢は諮詢（シシン）といふ熟語もあるやうに、トフ、ハカルと訓ずる字である。ここでは博問の問もある故、ハカルとよむべきである。存外かうした文字の讀めぬ人があるのである。此の文には格別むづかしい所はない。飾レ非といふ事も大方わかると思ふ。

【三四〇】 琵琶之湖百萬頃。川瀆注之者。大小八百餘。涓流不擇。濁水不レ棄。以成渺漫浸天之大。非唯以謙虛受レ物耶。故學貴卑遜取於人。不欲自盈。盈則志喪而行損矣。

（安井息軒、送ニ田子家一序）

通解 彼の琵琶湖の水は百萬頃（一頃は百畝）もある程、限もなくひろ〳〵として居るが、これに流れ込むところの川やみぞは、大小合せて八百餘りある。細い流でも濁つた水でも區別なく棄てる事なく皆包容して、それでひろ〳〵として天をもひたす程の大きさになつたのである。これはただ己れをむなしくして物を受け容れる――即ち人で云ふならば清濁合せ呑む雅量があるからではないか。それ故人の學問も我が身をひくくして人の下手にでて、人の善い所を取り入れることが大切で、自分はこれでよいと滿足する事は望ましくない。もし自ら滿足するならば、どこまでも修養しようとする志が無くなつて、行が惡くなるであらう。

語釋 ○川瀆　川とみぞ。○涓流　いさゝか小川、細い流れ。○謙虛　人にへり下り己をむなしくすること。○卑遜　己を卑下して人にゆづること。

【三四一】 孟子曰。君子之澤。五世而斬。小人之澤。五世而斬。予未得爲孔子徒也。予私淑諸人也。（孟子、離婁下）

○斬（タユ）　○私淑（ヒソカニヨクス）

通解 孟子が云ふやう「有位の賢人の人格の餘澤は、大抵五世の後までつたはつて絶えてしまひ、無位の賢人の德澤も凡そ五世の間傳はつて絶えてしまふ。自分は遲く生れたので孔子の門弟となることが出來なかつたのである。けれども幸に孔子の後まだ五世を經ないから、その餘澤が絶えないので、その道を傳へた賢人から內々孔子のよい所を聞いて、我身を善くすることが出來たのである。」と。

注意 ○この文に於ける君子小人は、位の有無に依つて分けて、位のあるものを君子と云ひ位の無いものを小人と云つたので、いづれも賢人のことを云ふのである。普通君子小人と云へば、德のあるものと德のない不良なものを云ふのであるから注意しなければならぬ。○私淑と云ふ言葉は、ひそかに我身を善くする義で、直接に敎を受けないが、內々其人を慕ひ其人を師として道を修めることを云ふのである。

【練一五七】 人之性多偏。自非聖人。所難免也。性之偏處。乃過之所生也。故雖賢者。不能無過。苟不能自修省。則其言行不過者寡矣。且衆人之心。多雍蔽而偏狹。故學者貴於多見多聞。好問取人。聞過納諫。不貴徒執己見而自是。（愼思錄卷一）

○該博（ガイハク）　○徒（タダニ）　○馮（コレヨリ）　○寡（スクナシ）　○間（ママ）

106

矜（ホコル）アハレム。**伐**（ホコル）。

矜。（音キヨウ）はホコルとよむ時は、自ラ賢ブル意、アハレムとよむ時は、不便ニ思フ意で憫と同義である。矜大、一貧などの話はホコルの方で、一憐、一育などはアハレムの方である。尙、一式（ウヤマヒノツトル）の時は、ウヤマフ、ツツシムの意である。伐（音バツ）は自ラソノ功ヲホコル意、矜伐と熟してゐる。又謗は大言、オホゲサニイフ意で、誇張などと常に出るから、ここにあげる必要はないが、謗の別字である夸を用ひた所が潤山あるから注意するがよろしい。

【三四二】學者以志爲本。無志則雖讀書該博。而無益於身。非徒無益。苟無志者。以才能在身。自矜侮人。則害德莫大焉。然有志者。或寡矣。是以雖天下之讀書者多。然有益者甚寡。有損者間有之。故教人。不可不擇也。（愼思錄）

通解　學問する者は、志――目的――即ち聖賢の道を體得しようとする目的を立てる事が根本である。しかとした目的が無いと、いくらひろく書物を讀んだとても、身に益する所がない。ただに益が無いばかりでなく、かりにも目的の無い者が、才能のある所から、自らかしこぶつて他人を馬鹿にする時は、それこそ自分の人格をそこなふ事、これより大なるものはない。けれども目的のしかと立つてゐる者は、寧ろ或は少いかも知れない。かういふわけで、天下に讀書する者は多いといつても、しかし實際讀書によつて益を得る者は少く、却つて損を招く者さへ隨分あるのである。それ故人を教育するには、ほんとにやらうといふ志のある者と、志の無い者とをよりわけて、志のある者を教育するやうにすべきである。

○矜育（キヨウイク）　○僞朝（ギチヨウ）　○賤俘（センプ）　○拔擢（バツテキ）　○優渥（ユウアク）　○盤桓（バンクワン）　○希冀（キキ）

【三四三】伏惟。聖朝以孝治天下。凡在故老。猶蒙矜育。況臣孤苦。特爲尤甚。且臣少事僞朝。歷職郎署。本圖宦達。不矜名節。今臣亡國賤俘。至微至陋。過蒙拔擢。寵命優渥。豈敢盤桓。有所希冀。（續文章軌範―李密、陳情表）（四一、專卷）

通解　臣が伏して考へて見まするに、陛下の朝廷では親に孝を盡す事を以て天下を治める本とされてゐまして、普通一般の年寄りたる者でも、やはりあはれみ育てられて、お情けを蒙つてゐますのに、まして臣は身寄りの者もなく困窮してゐることが、取りわけて非常にひどいのですから、聖代の德澤を蒙つて、老祖母を養はしていただかねばなりません。その上、臣は若い時正統でない朝廷（蜀漢）に事へて、尙書郎の役をしたのでした。それもともと仕官して出世しようと企てたまでで、別にかしこぶつて二朝に仕へぬなどとなまじ名譽や節操だてをして、人にほこる氣はないのでした。今臣は國が亡びたのでいやしい捕虜の身同然で、身分が極めていやしく數ならぬ者でありますのに、どういふわけか拔きあげられて、仰せごとがたいへん手厚いのであります。ですから、ぐづ〳〵として仕へることを躊躇して、此の上にも尙高い官職なこひねがふやうなことが、何として出來ませう、左樣な下心は勿論ないのであります。

語釋　○矜育（キヨウイク）　あはれみそだてる。○郎署（ラウシヨ）　尙書の役人、尙書郎。○宦達（クワンタツ）　お上に仕へて顯榮の身分になる。官途で出世する。○賤俘（センプ）　いやしい捕虜。○

○季路（キロ）　○盍（ナンゾ）　○爾（ナンジ）　○衣輕裘（イケイキウ）　○敝（ヤブル）　○懷（ナツク）　○拒（ハム）　○嘉（ヨミス）

（106）矜（ホコル）アハレム、伐（ホコル）

盤桓（ハンクワン）　進まぬさま。たちもとほること。ぐづ〳〵と躊躇するさま。○希冀（キキ）　こひねがふ。

【三四四】　顏淵・季路侍。子曰。盍各言爾志。子路曰。願車馬衣輕裘。與朋友共。敝之而無憾。顏淵曰。願無伐善。無施勞。子路曰。願聞子之志。子曰。老者安之。朋友信之。少者懷之。（論語、公冶長）（四二、東京高師）

通解　顏淵と季路が孔子の側に居た時、孔子が勸めていふやう、「なんでめい〳〵自分の志とする所を言はぬか、いつて見よ。」と。子路がいふやう、「私はどうか自分の車馬や裘着や輕い皮衣を自分だけで使はず、朋友と一緒に乘り一緒に着て、それが破損して使へないやうになつても少しも惜しがらぬやうになりたいと思ひます。」と。顏淵がいふやう、「私はどうか善い事をしてもいいそれを人にほこり顏する事なく、自分の事は自分がして、骨の折れる仕事を他人にまでさせる事がないやうにしたいと思ひます。」と。子路がいふに、「どうか先生の志を承りたい。」と。そこで孔子がいふやう、「自分の志はかうである。年寄つた者はその心を安らかにしてやり、朋友は信義を以て交りたいし、幼少の者はよくいたはつて自分に懷くやうにしてやりたい。」と。

【練一五六】　子夏之門人問交於子張。子張曰。子夏云何。對曰。子夏曰。可者與之。其不可者拒之。子張曰。異乎吾所聞。君子尊賢而容衆。嘉善而矜不能。我之大賢與。於人何所不容。我之不賢與。人將拒我。如之何其拒人也。（論語、子張）

○凡民（ボンミン）

○晏平仲（アンペイチユウ）　○一狐裘（イツコキウ）　○豚肩（トンケン）　○掩豆（オホフトウ）

待（マツ）。俟（マツ）。恃（タノム）。負（オフ）。

【三四五】　孟子曰。待文王而後興者。凡民也。若夫豪傑之士。雖無文王猶興。（孟子、盡心上）

通解　孟子がいふやう、「文王の教化を待つてそのおかげで、始めて奮ひたつて、善に進む者は、所謂パツシブの立場にある者で、平凡な民に過ぎないのである。けれどかの才智のすぐれた士などになると、たとひ文王の教化が無いとしても、それでもやはり自發的に奮ひたつて善を爲すのである。學問する者は自ら豪傑の士を以て期する所がなければならぬ。」と。

○待は來ルノヲマツ、アテニシテマツ、アテニスル意がある。○俟（昔シ）は餘にも作り、自然トソコヘ來ルノヲマツ、セカズニマツ、アテニセズナニデナシニマツ意である。マツとよむ字には、ソレヲアテニシテタノム、負はナニカウシロニタヨリトスルモノガアツテ、ソレヲタノム意。負は從つてオフとよんでもよい。○恃はタノムとよむ字には、怙、賴、憑などがある。

【三四六】　晏平仲。以節儉力行重於齊。一狐裘三十年。豚肩不掩豆。齊國之士。待以舉火者。七十餘家。（十八史略）

通解　晏平仲は自分の衣食をつづましやかにして奢らず、出來るだけ働いて怠らないので、齊國で重く用ひられた。彼は一枚の狐の皮衣を三十年間も着て居たし、祭に供へる豚の肩の肉も豆といふ祭器に一ぱいにならぬ程小さいものを使つた。かうして節約してゐたが人には仁惠を

○苛政（カセイ）　○蔣氏（シヤウシ）　○執（タクカ）　○賦斂（フレン）

施したので、齊國の士で、その助けに依つて煙をあげ世帶を持つて生活してゐた者が七十餘戶もあつた。

【三四七】 孔子曰。苛政猛於虎也。吾嘗疑乎是。今以蔣氏觀之。猶信。嗚呼。執知賦斂之毒。有甚是蛇者乎。故爲之說。以俟夫觀人風者得焉。（唐宋八家文―柳宗元、捕蛇者說）

通解　孔子がいふやう、「稅を重く取りたてるひどい政治は、人を取り殺す虎よりも恐ろしい。」と。自分はこれまで此の言葉が果して眞實であるかどうかと疑つてゐたが、今蔣氏が言ふ所から考へて見ると、やはりいつはりなき言葉であつた。ああ、稅金をかけて取り立てるために、人民を害する事が、此の毒蛇が人民を害するより尙恐ろしい事があるといふ事を、誰が知らうぞ。誰でもそれほどの事があるとは氣がつかぬものである。それ故此の事を書きしるして、それであの人民のやうすを觀察して政治を行ふ地方官（刺史）が、私の文章を得て參考にする時が來るのをまつ次第である。

注意　○苛政云々は（練一四五）（三六三頁）を參照するがよい。○執をタレカとよむ事については、（51）を見よ。○爲之說の「之」の形は（66）、爲をツクルとよむことは（7）を見よ。○說といふのは文の一體で、何でもそのものの性質狀態を說明して、さて人を諭し戒める文である。

【三四八】 夫民所怨者。天所去也。民所思者。天所與也。舉大事。必當下順民心上。合天意。功乃可成。若負強恃勇。觸情恣欲。雖得天下。必復失之。以秦項之勢。尙至夷覆。況今布衣。相聚草澤。以此行之。滅亡之道也。（資治通鑑）

○恣（ホシイマヽ）　○夷覆（イフク）

通解　いつたい民心が離反して怨むやうになれば、天が見すてるのである。之に反して人民が思慕するやうになれば、天が幸運を與へるのである。故に大事を擧げるには、ぜひ下に對しては人民の心の向ふ所に逆はず、上に對しては天の意志のある所に合ふやうにしなければならぬ。功業はそれでこそ成就するのである。若し自己の勢力の強いのを自慢し、勇氣のあるのをたよりに、感情の動くにまかせ、欲心をほしいまゝにしたならば、たとひ天下を手に入れたとてきつとまた之を失つてしまふであらう。秦の始皇や、楚の項羽のやうに勢力のあつたものでもなほ敗れてくつがへり滅びるに至つたのである。まして今吾等の如き平民から起つて、田舍の草深い低い土地に寄りあつまつた者が、若しかうした非道な行き方でやつて行くならば、固より滅亡への道をたどる事になるのである。

○枋得（バウトク）　○雅（ヤヒヨリ）　○軒輊（ケンチ）　○申包胥（シンハウショ）　○植（ショク）　○民彝（ミンイ）

【三四九】 枋得天資嚴厲。雅負奇氣。風岸孤峭。不能與世軒輊。而以天時人事。推宋必亡。於二十年後。每論樂毅・申包胥・張良・諸葛亮事。常若有千古之憤者。而以植世敎立民彝爲任。貴富賤

雅ニツイテハ(80)ヲ見ヨ。

○○○○ノ所ハヨク考ヘテヨミ且ツ解クガヨイ。

(107)待、俟、恃、負

貧。一不レ動二其中一。（續通鑑綱目）

通解 謝枋得はうまれつき厳格ではげしく、平素から風がはりな氣性をもつてゐて、その氣性にまかせて物事をし、かどばつて親しみがたく、ひとりぼつちでよりつきがたい風があつて世間とともに軒輊する――上つたり下つたり――俯仰する――つまり世の中に迎合して行くといふことが出來なかつた。そして天命の來る時と人事の上から推して、宋が必ず二十年後に亡びるといつてゐた。昔の樂毅や申包胥や、張良や諸葛亮などの事を論ずるたびに、いつも無限の憤を含むもののやうであつた。そして一世を救ふべき教を樹立し、人民の常に守るべき道を確立する事を自分の役目としてゐて、富貴とか貧賤とか――憂世の名利といふもののために、一度でもその心の中を動搖させた事はなかつた。

語釈 ○風岸孤峭 かどばつて人づきが惡く、ひとりぼつちでよりつきがたいこと。○軒輊 上ると下ると。軒は車の前の高く輕く上つてゐること、輊は車の前の低く重く下つてゐること「不レ能二與レ世軒輊一」は(二七九)(三一九頁)の「不レ能レ俯二仰時俗一」と同意である。軒輊は轉じて優劣の意となる。多くは優劣の意に使つてゐるから注意するがよろしい。○民彝 民の常に守るべき道、五倫五常の道。彝は常の意。

【練一五九】公之功德。蓋不待文而顯。其文亦不待序而傳。（唐宋八家文―蘇軾、范文正公文集序）

【練一六〇】予少豪於氣。頗負鄉曲之譽。自謂。功非其時。肆力於吾所志。死後干歲之名。唾手可收也。遂排衆言。欲綜百藝而迪之。（安井息軒、送田子家序）

【練一六一】用兵之法無恃其不來恃吾有以待之無恃其不攻恃吾有所不可攻（孫子）

○寡尤（スクナシトガメカクマヤフキヲ）
○闕殆（ヤフキヲ）

108

干（モトム）（クルス）（アヅカル）

○干（音カン）にモトムとよむ。自ラ己ノ才能ヲススメテ用ヒラレンコトヲ乞ヒモトメル意である。干は干犯などとヲカスといふ場合もあり、干渉、干與などとアヅカルといふ訓になる事もある。尙、モトムとよむ字は還山あるが、要は二七六頁に、徵は二四頁に、求は三〇六頁に、それぞれ出てゐる。覓はサガシ求メル意、需、須はナクテハナラヌモノヲ求メル、索ハサガシモトメル意である。

【三五〇】子張學干レ祿。子曰。多聞闕疑。愼言其餘。則寡尤。多見闕殆。愼行其餘。則寡悔。言寡尤。行寡悔。祿在其中矣。（論語、爲政）

通解 子張が仕官して俸祿を得るやうにするには、どうすればよいかとその道を孔子について學んだところ、孔子がいふには「君子の道は言行を愼しむことが何より大切である。古今の人の言葉について多く聞いて、その中疑はしき事は取りのけておいて、その他の信ずべき事だけ愼しんで言ふならば、人からとがめられる事が少い。又多く人の行を見て、その中不安心と思はれる事は取りのけて、その餘の確かに善いと思はれる事だけ愼しんで行ふならば、後で悔ゆることが少い。かうして言ふ事は人に非難される事が少く、行ふ事は後悔する事が少いやうであると、自然人から信用されて、祿を求むる道はその中にある――自ら求めなくとも俸祿は自然と得られるものである。」と。

(108)干（モトム）（テカスアヅカル）

○喜（フク）
○羞赧（シウタン）
○聞喜宴（ブンキエンシ）
○簪（カザス）
○垢敝（コツヘイ）
○矯俗（キヤウゾク）

（108）干（モトム）　アヅカル

【三五一】吾家本寒族。世以清白相承。吾性不喜華麗。自爲乳兒時。長者加以金銀華美之服。輒羞赧棄去之。年二十忝科名。聞喜宴獨不戴花。同年曰。君賜不可違也。乃簪一花。平生衣取蔽寒。食取充腹。亦不敢服垢敝。以矯俗干名。但順吾性而已。

（小學、善行實ニ敬身ニ）

通解　私の家はもと〳〵貧賤な家柄であつたが、先祖代々清廉潔白の精神を家法としてうけついで來たのである。私の性質は華やかなうるはしいものを好まないで、子供の時分からして目上の人が、金銀を飾つた華やかな美しい服を着せてくれると、そのたびにすぐ、顏を赤めてはぢてそれを棄ててしまふのであつた。二十歳の時進士の試驗科目に及第の榮をかたじけなうして、聞喜宴といつて天子が進士及第者に賜うた祝宴に、自分だけは花を頭にいただかなかつた。その時同期に及第した者が、「君主の賜物であるからいただかなければならない」といつたので始めて一花だけ髮に簪としてさしたのであつた。私は平生着物は寒さを防ぐだけのものを身につけ、食物は空腹をみたすだけのものを取つて、贅澤な衣食を求めなかつた。さうかといつて強ひ好んであかづいて破れた着物を着て、それでわざと世間の風俗にそむいた事をして、名を賣らうともしなかつた。ただ自分の性質に合ふやうにしたまでの事である。

語釋　○寒族　貧賤な家柄、みすぼらしい家すぢ。○清白　清廉潔白、むさぼる事なく物質

○羞赧（シウタン）はぢて顏を赤める。○科名　進士の科に及第したこと。○聞喜宴　進士及第者に對する天子の賜宴。○同年　同期の者。○垢敝　あかづいて破れてゐること。垢弊とも書く。○矯俗　世俗の風とかはつた事をする。俗情にあらざることを殊更にする。

【練一六二】山田長政。少而孀落有大志。不事商販作業。好談兵。雄傑自喜。流落寓於駿府。元和初。天下始定。士之求仕者。皆干侯伯。長政獨弗屑。

（齋藤拙堂、山田長政傳）

○漸（ゼン）（七七頁）
○力征（ツトメテユク）
○干（カンス）（モトム）

109

之（ユク）。如（ユク）。征（ユク）。適（ユク）。

【三五二】學貴以漸日進。天下之極遠。固有人跡所不及者。然日日力征而不已。則亦無所不至也。學之源流遠矣。苟下學之功。日進不息久。則可以上達也。（慎思錄）

通解　學問は順序を逐うて次第々々にして日々に進んでゆくことが大切である。天下の極めて遠い處には、勿論人類の足跡の印せられてない處もある。けれども毎日努力して旅をつづけて

○之はメアテトスル所ガアツテユク意、如も要するに「之」とほぼ同意である。適は又カナフ、タマタマといふ訓もある。征は多く旅ニ出テユク意に使はれる。尙ユクとよむ字で、少しかはつたものには、往、行などがある。往、逝などについては說明するまでもない。

(109)之、如、征、適

止まなかつたならば、それこそどんな遠い處でも亦至られぬといふ處はないのである。學問の源流も遠い――聖人の敎を施した時代も遠い昔の事で、後世の今日ではその敎をきはめて聖賢の境に入る事は困難のやうには見えるが、かりにも手近な事から學ぶ努力を積んで、毎日漸を逐うて進んで止まぬ事が久しい間に亙るならば、それで以て高尙なる天理が分るやうになれるのである。

注意　下學而上達は論語憲問篇の語である。一四頁を見よ。

【三五三】西伯修德。諸侯歸之。虞芮爭田。不能決。乃如周。入界見耕者。皆遜畔。民俗皆讓長。二人慚。相謂曰。吾所爭。周人所恥。乃不見西伯而還。俱讓其田不取。（十八史略）

○虞芮（國の名）
○遜畔
○慚

通解　西伯（西方の大名の義、文王のこと）は德を修めて人を感化したので、諸大名が皆西伯に歸服した。時に虞の君と芮の君が領田を爭うて、談判がまとまらなかつた所から、西伯に裁いてもらはうとして周に行つたが、周の堺に入つて見ると、田を耕してゐる者が、皆たがひに田のあぜをゆづりあつて、境界を爭ふどころではなく、又人民の風俗は皆年上の人にゆづつて不遜な者は一人も見あたらなかつた。二人の者は之を見て心に慚ぢ入つて、たがひにいつていふには、「吾々の爭ふ所は、即ち周人が恥としてゐる所である。」と。そこで西伯に會はずに自國に戻つて、ともゞにその領田をゆづり合つて取らないのであつた。

○董生
○適斯土

○歎

【三五四】燕趙。古稱多感慨悲歌之士。董生舉進士。連不得志於有司。懷抱利器。欝々適斯土。吾知其必有合也。董生勉乎哉。（文章軌範―韓愈、送董邵南序）

通解　燕や趙の國は、昔から、世に遇はずして憤り歎き、身の不幸を悲み歌うて放浪する士が多いといはれてゐる。董生はかれて進士の試驗に及第したが、連年いつもながら當路の役人に任用されないで、今徒らにすぐれた才能を抱いたまま、志を得ず辛氣な心持で此の地方に出發して行かれることになつた。ついて私は董生がきつとその地方の人士と意氣が合ふに相違ないと思ふのである。董生よ、幸ひに元氣を出してやつてもらひたい。

注意　○此の文に送假名が附けてないとして見たら、古にヨリを送る事に氣づかぬ人も出來るであらう。ヨリがないと意味が十分に出ない。「舉グラレ」とよむ事はむづかしくあるまいが連を「シキリニ」とよめぬ者もあらう。○「不レ得ニ志於有司ニ」といふのは、志を得て――即ち目的通り役人となる――といふ事が出來ない、思ふ通り役人となれないの意である。○懷ニ抱利器ニ は鋭い立派な手腕をいだいたままの意である。摘著「新訂受驗現代文解釋法」の四十五頁にも、「空しく利器を懷抱して蓬蒿の下に朽つ」の語がある。韓愈の此の文によるのである。

【練一六三】魯周公子伯禽之所封也。周公誨成王。王有過。則撻伯禽。伯禽就封。公戒之曰。我文王之子。武王之弟。今王之叔父。然我一沐三握髮。一飯三吐哺。起以待士。猶恐失天下賢人。子之魯。愼無以國驕人。（十八史略）

雜題

【練一六四】英雄舉事。必內度己才。外度敵勢。故有可藉之資。而不恃。有可取之利。而不爭。有所藉者。假于不藉。故能有其藉也。有所取者。假于不取。故能有其取也。（賀貽孫）

【練一六五】聞人之毀譽人。大抵聞其半可也。劉向謂。譽人。不增其義。則聞者不快於心。毀人。不益其惡。則聽者不滿於耳。此言可謂盡人情矣。（言志畫錄）

【練一六六】孟子曰。教亦多術矣。予不屑之教誨也者。是亦教誨之而已矣。（孟子、告子下）

【練一六七】好而知其惡。惡而知其美者。天下鮮矣。故諺有之。曰。人莫知其子之惡。莫知其苗之碩。（大學）（矣、桐生高工）

【練一六八】漸必成事。惠必懷人。如歷代姦雄。有竊其秘者。一時亦能遂志。可畏之至。（言志錄）

【練一六九】應酬事物。當先見其事之輕重。而後處之。勿以假心。勿以習心。勿厭多端以苟且。勿過穿鑿以繳住。（言志晚錄）

【練一七〇】人主宜以敵國外患。爲藥石。以法家拂士。爲良醫。則國不足治。（言志晚錄）

【練一七一】我朝之有國司。猶漢之有二千石也。漢宣有言。與吾共治民。其唯良二千石乎。漢有郡有國。國委之其君相。非二千石所能制也。如我朝。一王與六十六人。共治四海。其任之重。爲如何哉。（日本政記）

【練一七二】見新而遺舊者。人之情也。然時方日趨于新。未必盡愜吾意所存。往往不若出于舊者之無憾。則新者反陳。而舊者祇覺其可慕焉。（漢文類別—朱彝尊、感舊集序）

【練一七三】官怠於官成。病加於小愈。禍生於懈惰。孝衰於妻子。察此四者。愼終如始。詩云。靡不有初。鮮克有終。（小學、明倫通論）

○繳住（マトヒトドマル、カラミツイテハナレズニヲル）

比較對照 漢文解釋法 終

語句索引

【注意】本索引は解釋の本文及び練習問題の中に含まれてゐる要語句を摘出して、便宜上すべて五十音順、發音式に排列したものである。從つて例へば、「キ」は「イ」に、「ェ」は「エ」に、「チ」は「オ」に、「クヮ」は「カ」に入れてあり、「カウ」「クヮウ」「カフ」は「コウ」、「セウ」「セフ」「シャウ」は「ショウ」、「イウ」は「ユウ」として並べてある。その他も皆發音通りに順を逐うて載せてある。本索引は單に索引としてのみでなく、何等か讀者の役に立つ所があると思ふ。

ア

呼(アア) 一四
噎(アア) 二五・二四・三六・三八
嗟乎(アア) 九三・二三・三二・三七
嗟夫(アア) 二五・三七
嘻(アア) 三九
於戲(アア) 二九
猗歟(アア) 七〇
騂(アカシ) 二四三
愜(アキタル) 四〇三
瞭 一〇五
彰 一三一
勝(アガテ) 一六〇
阿衡 七一
遯レ畔 四〇〇
中(アタル) 一〇五・二二五・三五九
膺(アタル) 七四
與 三〇四・三〇五・三六一
淳 三四
鍾(アツマル) 三〇一
集大成 二二五
追レ睽 一七八
敖(アナドル) 一七九
盈レ科 一八〇
訐(アバク) 三三五
慝 一七〇
恤 一四一
矜(アハレム) 三九二
値(アフ) 三五
阿保 六一
甘 三九
周 三六
罔(アミス) 一二九・一三〇
殆 一三一・一四〇・二四一・三九七
過 一三〇
悛 三九
旌(アラハス) 三〇六
暴(アラハス) 三〇
見 一一一・一四〇・一〇六・一四一・三〇四
覩(アラハル) 一二四
燕(アル) 一八一
遯 一六八
行在 一九一
晏如 一四一
安宅 一二
諳知 三七
案牘 一三一

闇昧 三六〇
長(キス) 三〇三
寧 一八六
馬 二六七・三四七・三六五
惡(イヅクンゾ) 二三四・三三一・三四四・七四・九四
烏 一〇四
烏在 三三一
爽然 三三一
蔚然 三三一
異時 二八・一六〇
異日 一四三
倚信 一七八
一沐三握レ髮 四〇一
一飯三吐レ哺 四〇一
一介 九一
一匡 二四・二四
一蹶 一七〇
一舍 九一
一車薪 二四
一章 一三六
一嚔 一三三
一豫一游 一四一
一命以上 二九
一命而僂 一三
一壠之植 二九
一狐之腋 八四・二一三
一狐裘三十年 二九三
一切辯士 八九
一輸二一籌一 二三一
一國興レ仁 六六
一切辯士 一八八
一出二一機軸一 七一
一豬一龍 一〇八
一嚬一笑 三四三
一斑窺レ豹 三四
異端邪鋭 七〇
執 一八・二三九・二六八
執與(イツレソ) 二〇七
執若(イヅレソ) 二〇七・二〇八
馬慶哉 三〇三
逸才 三三一
逸 二九
夷狄 一七・一三七・二〇・二六八
逸豫 一九三・二六九
遣(イタル) 一四二・三三一
詣(イタル) 二三三
抵 二六六・三二七
底 三三三
効(イタス) 二六一
成(イタム) 二一〇
佯 一三
異 三四〇
居レ易 二四四
古之任者 三三三
異能 三六四
疇 一〇〇・二〇一
衣結履穿 二六六
異物 三三

以閉 三二
夷滅 一六八
未レ入二於室一 一八四
忌 二九三
苟 二九・二六・二六・二六九
隕 三七八
愈(イユ) 七八・三二一・四〇三
瘳(イユ) 三四二
已(イユ) 二九〇
彝倫 二四
委吏乘田 一六九
容 三六四
葦簾 一七三
色難 一六
正レ色 一七二
已往 一八二
印綬 一七三・三〇三
解二印綬一 三一〇
引據剪戮 二六四
隱若二一敵國一 三二四
隱約 二六七
渾(インス) 二四
露雨霏々 六七
陰秘壓抑 三六七
堙滅 二三四
喑啞叱咤 三
ウ
樹(ウウ) 三
享 一六
喪 三六八
亡(ウシナフ) 二二・二六八
偸(ウスシ) 三六六
菲(ウスシ) 二
偃 一三
迂叟 一七四
有待 一九
堙(ウヅム) 三四二
烏鳥之私情 三三
領 一六八
施レ零 二五一
右府 一〇二
羽毛齒革 二五一
沽(ウル) 二四二・三三六
市(ウル) 三三三
售(ウル) 九
鬱 三二九
煙火中人 三二七
捐館 九
婉曲 三五
偃蹇 九
蔚蓄
エ
盈虛 一四六
穎悟 七
穎脫 二一
嬰兒 三六三
攬二英雄之心一 三四
贏餘 二二
役 二二
醮 一〇
益者三友 二三九
易簀 二五
謂者 三六七
怨家 二三
怨望 一四二
煙火中人 四四
捐館 二五
婉曲 三三五
偃蹇 三〇三
蔚際 三六八
宛然 一四七
宛轉 二三三
苑囿 一八三
園囿 一六
鯢容 二二〇

オヲ

碩(オホイナリ) 四〇二
拚 六六
薇 二七八
王畿 二六六
蓄(オホシ) 二三六
横恣 三二三
王孫 一四八
横政 一六七
王伯之略 一四六
横民 一六七
横目之民 七〇
大率 四七・九八・二七四
率 二六九・二七一・三六八
類(オホム ネ) 二七二
釋(オク) 三六八
屋(ヲクス) 三六五
遠 三六六
愧ニ屋漏ニ 三四八
與(オケル) 三六六
惰 二六二・三六八・三三〇
懈 三六〇
敖(オゴリ) 一五五
作(オコル) 二六五・三三九
爲(ヲサム) 二四・二五・二七
斂 一〇七・二八
理 七六
咨 一四二・三三九
愛(ヲシム) 三四四・三四五
虞 五
倘 一六五
隕 五二
貶(オトス) 一七〇
鉄(ヲノ) 一六八
得レ己 七
克レ己復レ禮 二〇
乾 一〇七・二六八
以(オモフ) 三四八
言(オモフ) 三七
謂(オモフ) 二三二・二七二
顧 三六〇
寡(オモヘラク) 二六一
以謂(オモヘラク) 四三
以(オモヘラク) 三六
以爲 一四九
衡ニ於慮ニ 七九
比(オヨブ) 二六三
迨(オヨブ) 二六・三三二
逮 二七二・二七三・三三九・三三〇
鑒 二七二・二七五
汙隆 二二
虞(ヲル) 二六・三四七
温恭 二五一
恩義相奪 二四二
温潤 二二三
温粹謙和 一七五
温飽 三三四
温良恭儉讓 一七五
二〇四

カ クワ

歌謳 二六五
瑰怪 三二四
謂々 二二四
恢郭 二五九
恢廓大度 二六三
開闢 九二
魁岸 三六四
外廐 三三四
會計之餘功 八〇
怪巧瑰瑋 二二
乖忤 三六〇
劾 二六二
懈惰 四〇三
海内 二七四・二九四
海内之士 三六四

剋到 一六七
該博 三九〇
瓦解 一〇二
蓋(カカグ) 一六一
下學上達 八一
下學而上達 一四・四〇〇
下學之功 三九九
河漢 一〇一
駕馭 二二八
賈(カギル) 二三六
廓(カク) 一六八
下愚 三五
學海 二二四
謂々 八四
學士 三三二
嚴鑑 七四
客星 一三五
岳崇海豁 二二九
華廬 六四
藏(カク) 二九九
蓋(カク) 三九〇
下言而上用 一〇二
寡妻 一六一
簪(カザス) 八一
申(カサヌ) 一四・四〇〇
家貲 三九九
遐思 一〇一
遐邇 二二八
纍(カシグ) 二三六
和氏璧 一六八
稼穡 三五
貨殖 二二四
假心 八四
寡人 三三二
尚(クワス) 七四
苛政 一三五
苛政猛ニ於虎ニ 二二九
華藻 六四
沐レ風櫛レ雨 二三五
象 三六
固 二九五
機 九
下陳 二九五
褐寬博 三九八
合從連横 三三
磐達大度 一三五
常(カツテ) 一九六
曾 二七・二四七
夫(カナ) 一四九
悲夫 二三
華而睆 三七
刮目 二四
衣レ褐 四〇三
解レ褐 二五四
不必 二六三
遐年 二七・二六八
皖 一六三
更(カハルト〜) 三三〇
市(カフ) 三三四
眷 三五八
被レ髮左レ衽 二三四・三三〇
援レ上 二四四
黍ニ科名ニ 三九八
貨利 一七
假是非 三三一
家累 三一九
可レ黨之養 四〇二
渠(カレ) 八八・九五
薄(カロンズ) 二四一
錄 一〇
間暇 二六・三三七
寬假 一六〇
袞冕 一六八
感慨悲歌之士 四〇二
卿角 三〇三
侃々 一三五

間關 三七〇
間關踏頓 一九九
餘寡孤獨 一〇
環嚮 一八六
緩頰 八八
涵煦 一八四
桓圭袞裳 一〇九
巖穴之士 一三四
甘言 八四
甘寢 九
甘脆之昧 三一〇
煥乎 一一〇
歡狎 三〇五
眼采炯々 三七五
關市之征 一八九
莞爾 一八七
罕種 三一一
姦豎 三八五
函人 三四七

鮮睡 一〇
汗青 九〇
間靖 一四一
歡成 一三七
間然 一一
悍然 一七
諫疎 八七〇
頑率奢傲 一三五
褒族 三八八
狄待 一九六
髏高眉慶 三七五
滯濯 一三五
宦達 三九一
肝膽相照 三七一
披二瀝肝膽一 三八〇
酣暢 三四
環堵蕭然 一四一
宦成 四〇三
奸佞 四八

應難變故 七〇
間不レ容レ髮 一三五
頑夫 四六・一六七
一孚浹洽 六六
慢慢歎息 一四四
簡編 一四一
挂レ冠 五一
簡默 一〇八
一阨 一三五
翰林 二四一・三一一
千檣 一八八
加レ冠 三一七
解レ歡 一九六
廉レ頑 一七一
廊下 一七
飼湯 九四

十

奇禍 一一
鉤鑑 七一
騏驥 三六六
希冀 三九一
儀軌 一七
巍々 三〇一
巍々乎 一〇
負二奇氣一 三九五
規矩 六
嶇嶇 一七
鞠躬 一〇七
絪躬盡瘁 三一五
詭計 三九八
樓警 三四〇
危坐 一八
棄市 一九
基峙 一九四
歸宿 三八
跂 三三一

饑 一〇三
機 五四
几席 九一
氣節之士 一九五・二〇五
喟然 一二六
羈束 六四・三一三
奇致 三四一
愧恥憤恨 三三五
吉行 一九
拮据 一六四
喫著 一七一
僞朝 三九一
期年 一〇三
附二驥尾一 三三四
奇兵 九四
機變之巧 一一三
跬步 三六六
覬歩 三六六
以二君之鑒一 一三三

逆節 三三七
逆鱗 一三八・二〇七
裘葛之遺 一四六
九合 一一四
九天之高 六六
九賓 一三三
窮阨 一三一
窮廬 八三
遺レ舊 四〇三
矜育 三九一
譽應 一九四・二一九
僥倖 五一・一四六・一五一・三四九
狂簡 三六
鄉曲之譽 三九六
蘗桂之和 三三〇
籤筍 一六四
驕侈 三七七
挾持 一八一
仰事俯育 一三七

緻住 四〇三
俠者 二四七
竟夕 一一七
鄉先生 一八二
怯懦 二七九・三八四
狂直 三〇五
鄉黨 三九八
不レ堪二伎癢一 四七
拱把 一三四
矜愍 五三
嬌拂 三七二
梟雄 二三三
徇湧澎湃 三六
負レ强恃レ勇 三九五
局促 九九
曲禮 一五五・一五六
立レ極 三三三
居諸 二四二
居然 一九一

毀譽得喪 一三三
倨傲簡漫 二六六
鉅萬 二三七
魚龍 九二
羈旅 一八八
麒麟 一三四
鐵(キル) 一一六
釣レ奇竊レ名 三三五
市レ義 二三四
譁懿 三三〇
巾幗鬚人 一八四
欣歡 三六四
欽仰 一六八
金城湯池 六六
金聲玉振 二一六
欣然 一四二
啓二聾瞽一 七四
秉二釣軸一 三三三
禁庭蕭散 一七三

金聲而玉振レ之 二二五
浩レ樣 二九五

ク

酒合之術 一九三
偶語 一一九
偶然 三〇三
寓目 二六四
鉤々 一二一
嘔嘔 一二三
結レ草 三三
虞舜 三八六
癯瘦 三七五
瞿然 一四〇・二二八
藉レ口 一四三
杜レ口裏レ足 六一
屈辱譏誘 七〇
衛(クツワ)
納レ履 三六一

口傳耳受 一四六
倚(タノハフ) 三五二・三五三・三五七
刈弊
颶風 三五
繼レ踵 一八八
不レ旋レ踵 一九七
經(タビル) 一二四
引レ領 二二七
與(ダミス) 二二四・三〇〇
罔(クラシ) 一三二
啖(タラフ) 二二
茹(タラフ) 二〇八
校(クラブ) 一七四
繒(クロム) 二七四
群賢 一二四
君子 八六
君子人 一〇〇
君子儒 二八七
蘄約

暴倫
軍旅 二六四
二一

ケ

經營 二九五
圭角 三〇五
景行行止 四四
經史百子 二七一
經始 一九八
景從 三二七
形勢不レ如レ德 四〇
形勢之途 三四九
形勢 二八八
烱然 二六三
雞豚狗彘 三一
徑道 二三
恚怒 二八八
刑辟 三四九
雞鳴狗盜 九三

維レ雞
土二木形鐵一 二三五
雞肋 二七五
潤(ケガス) 三四
溉(ケガス) 二〇七
飛レ展 四三
闕失 二二
月旦 四七
血食 一五
刮(ケヅル) 二六八
剔(ケヅル) 一七
闕 三五
儼恪 二一〇
縣官 二四
謙虛 二六
兼愛 二三
絃歌之聲 一八七
乾々 二六九
詣首 一五

隱顯同醜 三三
犬豕 一五〇
繭絲 二五
顯仕 一五二
黔首 一九
卷舒 二四二
涓人 一〇二
震懾 三三六
原泉混々 二八〇
險躁 八三
健啖 二八五
軒輊 三九五
犬馬怖懼之情 五二
權謀術數 三四九
賢不肖 一四六・一八四
畎畝 五一
元良 三八八
涓流 一九〇
軒露

卷 三三四

コ

孤 二三五
故 一九二
耗(カウス) 九六
轂 六
江淮 一八四
苟焉 八二
講筵 三七五
成二甲乙一 四二
閤下 二六四
江海 三六六
溝澮 一八〇
高牙大纛 一〇九
耕稼陶漁 三八五・三八六
決二江河一 三一三
考官 二八二
黃冠 一八〇

江漢 三三二
江漢之朝宗 二七五
浩氣 二一九
瀕氣 三〇二
行義 二六六
郊墟 二四二
公卿大夫 二六六
溝洫 二
畊釣 一二五
硜硜然 二二四
拘牽 一一八
賈獻 一七三
巧言令色 二八七
巧佞 三七七
江湖 一二五
耿々 九
逸々 八二
皜々乎 三三二
悻々者 二二五

冒々 二七五
鴻鵠之志 一八六
皓皓之白 一八九
恒產 一三〇・一六〇
孔子徒 三六九
寇讎 一三〇
苟且 一六九・四〇三
閭邑 二六八
校 二四九・二五三
後生可レ畏 二六七
浩然 二九〇・三八五
浩然之氣 六八
絢素 三三七
拘束 一六八
傲惰 八七
興替 七五
孝悌 三三・三二三
叩頭 三〇三
高蹈 一六七

講演
浩
倚ニ於衡一
曠廢隳惰
槁暴
干ニ侯伯一
攻發
宏富
光風霽月
口腹
垢蔽
下ニ公門一式ニ路馬一
贊ニ皇猷一
滉洋
蛟龍
蛟龍得ニ雲雨一
青粱
幸臨
逗（コホル）
爭レ衡
案レ甲休レ兵
品レ紅評レ紫
狐貉
昊下阿蒙
故舊
克剝
孤苦
五斗米
克伐怨欲
股肱之力
告朔之餼羊
五穀
五畝之宅
嘗試（ココロミニ）
嘗（ココロミニ）
不レ像
賈胡
斯
云（ココニ）
互市
賈人
故人
晤
賈
姑息
普瞰
拒
忽焉
忽微
虎豹之秦
顧眄
庶
庶幾
希
事ニ斯語一
適ニ茲土一
斯文
亨（コノム）
顧命
狐兎之蹊
諸（コレヲ）
病レ諸
淑ニ諸人一
嘗ニ諸紳一
舍レ諸
惟
焉（コレヨリ）
陷ニ之死地一而後生
故老
夸耀
生レ辱而後レ實
憑ニ藉虎威一
跟
闃外
懇到切至
衰晃
困厄
困尼

サ

責（サイ）
宰
齋戒
際遇
宰執
祭酒
濟勝之具
妻黨
無レ載之車
猜忍刻厲
豺狼
倡（サキガケ）
向者（サキニハ）
剖
遣（サク）
辟（サク）
朔南
錯落
易レ簀
挾レ策
左支右吾
左衽
左衽之區
蹉跎
徹レ幸
察察
蹉跌
喻（サトル）
詐佯
暴（サラス）
盡
三戒
三軍
三軍之衆
巉巉然
巉然見ニ頭角一
三尸蟲
三舍
避ニ三舍一
三尺童子
三尺之童
參省
寰斥流離
攢簇
山澤之癯
三蟲
三不朽
三人行
三人成ニ市虎一
三樂
三略

シ

史
貲（シ）
餌
祉（シヒナ）
誣
罔（シフ）
四海
祇同
弗レ如
云レ爾
不（シカラズンバ）
然而
而況
仕宦
死肌（シキ）
辭氣
四凶

資粢 二三五
司業博士 二三八
自匿不レ息 二六九
施(シク) 三三
使君 三七
自經 八
至冒 八
御行 八
伺候 一九
乘二至公一 二四九
死獄 三三七
而今而後 一〇四
詞采煥發 三六
孜々 三六四
自若 三五〇
錙銖 三二四
私淑 三三五
趦趄 三六九
爾書 三四九
循 一
司城 二三五
史乘 二三八
私乘 二六九
矢人 三三
至人 三七
齒 八
市井 八
死生有レ命 一九
咫尺之書 二四九
爾曹 三三七
俯二仰時俗一 一〇四
肆然 三六
日月之食 三六四
日星隕レ曜 三五〇
士大夫 三二四
馴(シタガフ) 三三五
邀 三六九
徇 三四九
四達 一二四
輔車 三六四
疾言遽色 三五七
失厝 三四七
執政 一〇一
叱咤 三三一
櫛風沐雨 一二〇・一六一
執鞭之士 一二四
疾雷 一〇
自適 二七
子姪(シテツ) 三二九
自得 一六一
恐 七〇
數(シバシバ) 二六六
一二五・一六一・一六四・一六五
蹙(シバシバ) 八
屢空 一二九
姑 一五〇・三二六
斯須(シバラク) 二二〇
頃之 三三
資粢 二二
四方之志 二三五
資望 三四
車騎服御 一四
弱冠 一八
社稷 一六
社稷之臣 一六
社稷之安危 一〇
澀然 一五
澀落 一五〇・二二八
沙中偶語 二〇
奢靡 二六
車服 一〇六
車馬衣輕裘 三五一
輸贏 三三
斛 三〇六
終古 一四一
舟楫 八

舟楫 二三一
什一 二六九
什襲不レ售 六〇
從祀 一七三
戎事 二六四
衆庶之和 三四一
習心 四〇三
牧藏 三四五
蓬蒿 三六八
衆芳 三〇一
衆萌苗 二一九
衆妙之門 一七
秋陽 三五一
州里 二四〇
遣二臭千載一 二〇七
貽二臭千載一 三七五
俟忽 九二
睨 二三九
夙夜 二七七・二七七
夙夜匪レ懈 二三一
宿飽 二六九
首功 六〇
酒食 一七三
孺子 二六四
首唱 三四一
守成 四〇三
儒生 三四五
手足之情 三六八
出藍 三〇一
述職 二一九
怵惕惻隱 一七
須臾 三五一
儁偉佚宕 二四〇
儁傑廉悍 二〇七
循々然 三七五
峻峭 九二
榛蕪 二三九
畯良 二三五・二七七
醇醪 七
芋(ショ) 九四
頌 一六二
牀下 八
尙友 一六
常格 三七七
小奚 一〇三
狀元 二六四
高賢 二六二
勝算 一〇四
常算 二三五
小銑 二七七
小子 二〇六・二三二
承蕃 三三
囁嚅 一七一
唱酬 一二六
庠序 三五五
昭昭 三三七
丞相 二六九
小心翼々 二六
小人儒 一二
樵蘇 九四
上疏 一四九・二三五
消長 一六
峭直 八
商販作業 三六
慴伏 二三五
從容 三五七・四七七・二六
從容指顧 三〇
徜徉自適 二三五
條理 二三五
商量 一四
倚論 二三五
約レ從 一三一
寄二食飲一 一四七
女謁 一〇一
式 二六・二六〇
軾 二六一

摩 三三〇
職 二六六・二六八
秉レ燭 三六
鋤鬚斬斷 三七三
恕 三七四
書疏 二二八
諸蠻 三二九
庶人 三二一
芝蘭 八五
辭理明暢 三七五
支流餘裔 三二四
師旅 四〇
識 三六三
砥礪切磋 七一
存レ祀 三四
執レ贄 三七五
强二人意一 三二四
紳禹疏鑿之功 七一
心畫 二六五
新儀 三三〇
秦項之勢 二六六・二六八
進士 三六
進士第 三七三
廩澤 三七四
浸漬涵蓄 二二八
唇齒 三二九
唇齒輔車 三二一
親炙 八五
人爵 三七五
神色 三二四
心醉 四〇
眞是非 三六三
秦楚之路 七一
進退 三四
身體髮膚 三七五
宸衷嘉尙 三二四
震蕩 七一
慎獨 二六五
新者反陳 三六五
里レ仁 四〇二
觀二人風一者 三七一
旋レ踵 三七四
人牧 二七七
釋 三四
捐(スツ) 三六九
施(スツ) 二〇七
輒 三四
輒 八七・三六九
而(スナハチ) 一四二・一九六
便 三六三
曾(スナハチ) 八二・八六
都(スベテ) 一七五
亟(スミヤカ) 一六一
須臾 三七五
寸陰 三四六
崇奉景仰 三〇
稍(スコシクモ) 三二七
鮮 二七・二六六・二七七・四〇二
濟(スクフ) 二九・八二・三五五・三四〇
舍(スツ) 七〇・二九九・三六六・三六八

青雲之士 二二四
正會 二六八
靡敎之懿 三三四
生業 三四〇
說客 二六三
清儉 二七
正鵠 二四四
省察 二五五
靡色 一七
精金 二二二
正字 二七一
正閏 一四四
征(セイス) 二九九・二六九
精忠奇冤 二二一
性度 二六八
制馭 二六六
性度恢廓 二五二
成敗利鈍 二〇七
清白 三九八
靡勘 二八〇
旌表 二六八
生亦我所レ欲 三三四
生民休戚 三四〇
省覽 二六三
研レ精 二七
惜陰 二四四
碩師 二五五
腊 一七
尺寸 二二二
植二世敎一 二七一
世故 一四四
絕海殊域 二九九・二六九
切磋砥礪 二二一
截取 二六八
折衝 二六六
折中 二五二
節鎭 二〇七
節目 三九八
折レ節 二二五
攖(セマル) 三六
數(セム) 二六三
千鎰 二六二
前愆 一九四
先王之義 九九
遷客騷人 二四四
纖妍 二五五
先考 一七五
千古之憤 二六五
千載之秘 三九五
纖毫 三四二
千載而一時 三七
穿鑿 二九〇
千秋 三六六
善柔 一七六
千緒萬端 二二一
餑 四五
餑粥 一七九
先生 二六
先聖後聖其揆一也 三六六
僭竊 二五
戰々兢々 二七七
漸 七七・三九九・四〇二
然諾 二六六
川瀆 三六八
先入爲レ主 二二一
無レ伐レ善 三九二
剪伐 六四
千萬年之業 二九四
羨餘 一七五
千羊之皮 一九〇
鷹鸇 八四
戰慄 二七一
折二衝千里一 一七
千里馬 三二四
責レ善 九・一九・一〇二・二九・一三九

取二善於人一 三八七
ソ
狙 八
阻 二七
嫂 二八一
綜聚 一八八
總角 三三五
噪急粗率 二二八
騷翔狗 二八三
想見 一八八
創業 五
裝嚴 二八八
操觚 二四
倉皇 一九五
造次顛沛 一六五・一七〇
蒼生 三三三
鄙然 一六六
聰前 三〇七
蒼々然民 一八三
蒼々暮色 三〇一
宗族 一三八
倉卒 一六五・二四六・二八八
損 一四三
龐突蕭然 二七一
桑土 二二六
藏魄之地 一〇四
造物者 三〇一
草昧 五・一七〇・二九四
草莽 一〇三
草木同腐 二六九
桑榆 一
練攪 一九六
層巒複嶺 四三
槽櫪 一四〇
草廬 一四八
東帶 三二〇
粟 一四〇
族滅 三二七
爲レ俗干レ名 三九八
不レ忮不レ求 三二
暴(ソコナフ) 八六
損 三八
鮑鰒 二六三
塑像 二三四
素車白馬 一〇一
非(ソシル) 一一九・一七九・二六
詆 四
毀 一〇三
短(ソシル) 一一〇
訾 一三六
素(ソス) 二七
措置 三七
卒然 一八一
率服 三三
狙豆 一一
易(ソナハル) 二一〇
增二其義一 四〇一
慎二其獨一 一〇六
竊二其秘一 四〇一
負(ソムク) 六六・三八
畔(ソムク) 三七一
其然豈其然乎 九六
失レ措 三二一
尊爵 一三
損者三友 二三九
存卹 六
樽酒鑄肉 一三三
飧饔 二三六
タ
大瀛 三〇一
大厦 一四六
大塊 三六
大駕 一四七・三八一
臺寄 一四七
大義 二一九

大限 一〇七
大故 三四
對策 一八二
太山 三八四
大匠 六
太守 八
韡者 一九三
太史 二三五・一〇〇
大丈夫 一六六
大人 三五四
大節 一〇〇
怠墮 一二一
合鼎 三七三
大賓 一二三
太夫人 一三九・三三六
大風 一三九
大夫 一六〇
太平之民 三六九
大略 三七
頹然 三〇二
尙(タカクス) 三五四
崇(タカクス) 一〇一・一六九
卓犖瑰瑋 一六一
謫仙人 三三
託孤寄命 一〇〇
跅弛之士 三二
卓爾 一一六
託孤之任 七二
蘊(タクハフ) 一七九
卓然 一一五
儁(タグヒ) 三〇一
踔厲風發 一三三・一七一
他山之石 一四三
多少 六六
脫塵 一七〇
資(タスク) 六四
相(タスク) 一二四
輔(タスク) 一二四
情心 三六八
直(タダ) 一〇六
第(タダ) 一四〇
祇(タダ) 四七
多多益善 三六
督(タダス) 二三九
飭(タダス) 三二
質(タダス) 三七
規(タダス) 三八・三七九
徑 一六八
迹(タヅヌ) 一九
止(タダニ) 一一〇
特(タダニ) 二一・二四五
徒(タダニ) 三一六
宗(タツトブ) 三〇七・三〇八
上(タツトブ) 一六二
多(タトス) 三三
縱(タトヒ) 一六六
縱合(タトヒ) 一六三
如二貍兎一 三六
達道 一〇六
乍(タチマチ) 一四〇
繹(タヅヌ) 四七
濼(タダヨハス) 三六
植(タツ) 二三九
嫡(タノシム) 一〇六
荒二於嬉一 一六九
恃(タノム) 三九五・三九七
負(タノム) 三九五
怙(タノム) 一九〇
仆(タフル) 三六二
懦夫 一七・四六・一六七・二六
誑(タブラカス) 八
多聞 二三九
弗レ勝 一一〇
剉レ民 三三
矯(タム) 三三
斬(タユ) 三八九

贈(タル) 一二三
執(タレカ) 一八四・二三一・二六九・三五九
軽(タワム) 二〇三
興レ惰 一七一
短褐 一四二
弾丸黒子 三一八
散飄 一四二
敷食 二八四
丹心 九〇
断斉盡粥 二一
断々焉 三一
澹泊 八三
譚(タン) 二四

チ

置郵 二〇三
遝(チカシ) 一七
庶(チカシ) 吾七・六六
幾(チカシ) 六〇
庶幾 一二三
治具 二六九
値遇 二〇三
治忽 一七一
箎酒 一四二
蹇(チヂマル) 三一八
馳騖 一四二
持満之末 二八四
罪ニ地脈一 九〇
中原 二一
中興 三一
忠厚 八三
中行之士 二四
籌策 二〇三
中射之士 二〇三
疇生 一七
蹰躇 吾七・六六
惆悵 六〇
黜陟 二五九
中道而廢 二六九
中庸 一九一
迍邅困躓 二六
徴 一四二
朝衣 二六六
重裀 二〇五
朝儀典章 三八三
長城亭障 三四二
超世之心 二五二
帖然 一〇五・二一九
悵然 一〇八
朝宗 二七七
雕琢之士 四〇
重瞳子 三六七
兆民 三三六
寵命優渥 二四二
頂門一針 一八二
沽レ直 二〇八
沈殺 三五七

ツ

痛毀極詆 三三
病(ツカル) 三九
培(ツチカフ) 二九二
冢(ツカ) 一六
即(ツク) 三七〇
賾(ツグナフ) 三八一
悉(ツクス) 四
殫(ツクス) 四・四三
爲(ツクル) 三一・三四六
鍾(ツグ) 二六・二九
維(ツナグ) 七〇
夙興夜寐 二〇八
勗(ツトム) 二六八・二八四
奮レ翼 一六
蘊(ツム) 一

鼎(テイ) 三五九
鼎鑊 二三三
停客 一六
廷議 三八
提携捧負 一八三
朝三暮四 八
底止 三六
涕泣 二四
廷試 一七一
天錫 二九四
鼎足之勢 二五九
遞(テイス) 二七
定省温凊 三四六
鼎足 一七
趙孟之所レ貴 三三
定レ鼎 二七二・二八六
敵國外患 四〇一
徹視 二二三
轍(テツ) 三六二
排レ手 三・六五・一六八
天下之廣居 二六
天爵 一五五
天爵 三八
傳舎 一八三
天資 八
天授 三六
天壽 二四
回ニ天日於既墜一 一七一
殿(デンス) 二九四
殄瘁 二五九
天造地設 二七
天墮 三四六
天作孽 一七
天定而勝レ人 三三
天歩艱難 二七二・二八六
顛踣 四〇一
天倫之樂事 二二三
天理之溟涬 三六二
天理 三三
典謨 一六六
田廬 一五五
天怪 一六
殄滅 一三
天授 一五二・三九五
卜
蘿(ト) 三三
磴(トウ) 一七
黨(タウ) 一九一
凍餒 四七
童丱 一九〇
刀鋸 七一
唐虞 三三七
東隅 四六
偏ニ倒懸一 三二九
倒懸 八九
投竄 三六
桐梓 一四四
洞然 三三
蕩々乎 一七
洞洞屬屬然 一三三
升レ堂 一五五
同年 一八
憧憬 一九六
濤瀾洶涌 八三
桃李滿レ門 三六
發レ業 三六
愆 四六
寡レ尤 一四六
輒レ置 三七
在レ德不レ在レ險 一三三
督郵 一〇八
篤學 四五
斗筲 三三九
斃レ歳惕レ時 一四四
徒爾 一〇三

燼炭 一六七
梟 三三
嗷嗷乎 二四
駑馬 九
駑馬十駕 三六六
匱(トボシ) 八
僧(トモニ) 三一
與(トモニ) 三〇一
搏レ虎 三八
虎負レ嵎 三八
肚裏 一七四
朶(トル) 一九
挹(トル) 八〇
資(トル) 三三
乘(トル) 三三
攫(トル) 三四
度越 三四
豚肩不レ掩レ豆 三九三
屯長 一八六

ナ

苗之碩 一八
助レ苗長 一四一
攘レ苗 九三・一九七
由(ナホゴトシ) 一〇
且(ナホ) 一〇一
縮(ナホシ) 一四
永言配レ命 一三
徵(ナカリセバ) 一三四・一三五・一三七・一三〇
亡(ナシ) 一三
末(ナシ) 一三
做(ナス) 一八四
濟(ナス) 一八二
泥(ナヅム) 一八一
無(ナミス) 一九六・一四五
效(ナラフ) 一九
倣(ナラフ) 一四〇
方(ナラブ) 一五〇
駢(ナラブ) 一五〇
遂(ナル) 一三五
女(ナンヂ) 一四六・一九八
若(ナンヂ) 八・一三
而(ナンヂ) 一三六
爾(ナンヂ) 一五・一五四・一三五・一三五・一三六・一九九・一六五
汝曹 一五〇
爾志 一九一
南陽 一四
何爲者 一九
何爲 一三
癸爲 一八四
癸(ナンヂ) 一八二
胡(ナンヂ) 一八一
曷(ナンヂ) 一九六・一四五
庸(ナンヂ) 一三一
奚擇 一〇六
奚啻 一〇六
南風不レ競 一四一
南面 九三・一九七
首難 一六〇

ニ

惡(ニクム) 七〇・一六八・一七一
亡(ニグ) 一三
二更 一六六
肉羹 一六八
肉袒 一三
二三子 四・八一
二千石 三〇九・一〇三
驟(ニハカニ) 八
暴(ニハカニ) 一六〇
遽(ニハカニ) 六〇・一五・一三七・一六
割レ鷄焉用ニ牛刀一 八
肖(ニル) 三一
任俠放蕩 一四〇

ヌ

衣レ繡夜行 八
嬾(ヌスム) 一八九

ネ

寧靜 八三
勞(ネギラフ) 一

ノ

棄背 二一九
遲(ノガル) 三〇六
跕(ノコス) 七四・三三七
莅(ノゾム) 一三五
臨(ノゾム) 一三五
屬レ望 一九四
法(ノットル) 一八〇
則(ノットル) 一三八
申(ノブ) 三八五
信(ノブ) 三六〇・三八二・三八三・三八四

ハ

廢舉 一六一・一三七
背水陣 三七二
陪臣 一五〇
敗績 一
沛然 二一七・三一三
以ニ馬革一裹レ屍 七四
博學宏辭 一四一
壁窠 三〇六
白章 一九一
駁(バクス) 一七七
白晳 一三五
伯樂 一三五
規(ハカル) 一九四
詢(ハカル) 一八〇
揣(ハカル) 一三八
億(ハカル) 三八五
度(ハカル) 八二
揆(ハカル) 一四一
伯仲 二七七
搏鬪 三六
暴白 三三五
嬰ニ白刃一 一〇一
博文約禮 一三七
衣レ帛 三一
墳(ハカ) 三三〇
覇者之佐 一三〇
靡レ不レ有レ初 四〇三
首(ハジメテ) 三一七・三七四
首唱ニ大義一 五一
甫(ハジメテ) 一三六
始如ニ處女一 三七九・三八一
挾(ハサム) 一〇九
播(ハス) 二一六
八音(ハツチン) 一七一
跋扈 三一八
怍(ハヅ) 三〇四
媿(ハヅ) 三三
太(ハナハダ) 八七・九六・三七一
垂レ翅 一
沮(ハバム) 一二七
發暢 六六
蚤(ハヤク) 四〇
豐(ハルカ) 一五一
爬羅剔抉 一六九
變夷戎狄 三三五
萬化 三〇二
盤桓 三九一
輓近之文縟 一六四
畔逆 一五六
盤根錯節 九八・三七一
萬乘之國 一〇二
繁縟 一六三
繁文縟禮 一六四

曉節 二六二
萬世之業 三六九
版插 一六一
萬朶 三〇一
蠻貊之邦 二四〇
頒白 三二
反哺 五三
萬物之逆旅 三六
樊籠 二三三
般樂怠敖 三三七
救レ焚拯レ溺 三七三

ヒ

飄然 三三
漂蕩奔逸 三五
飄風 二一
漂汎漫濫 三六
苗裔 二六〇
表叔 二九

漂母 一四七
眇然 二三五
表勵崇飭 一〇四
渺漫浸天 三八
濕(ヒクシ) 一七九
攘レ臂 三九
帥(ヒキヰル) 一〇七
將(ヒキヰル) 一六〇
卑(ヒクシ) 二
微權 三五
徴行 一八一
誹笑 二九
悲嘯 九二
庇(ヒス) 一九八
羊晳 一八二
斐然成レ章 二六
卑遜 三八
筆削 一四三
匹夫匹婦 二四

西夫 一六九・一八一
西婦之節 六六
西夫之勇 三
爲レ人 三・八八・二六三・二七七・三七七
人之安宅 二六
匕筯 三七
私淑二諸人一 三八九
取二於人一 三八五・三八六
廟堂 二三五
品物 一六三
稗補 三六八
不レ排不レ發 八二
鄙倍 一三〇
百代之過客 三六
百里之命 一〇〇
行二百里一者半二九十一 二三二
百度維新 一六五
百乘之家 二七九
綜二百藝一 三九七

百萬頃 一八八
百辟 一〇七
病羸 三六八
非禮 二〇
彌留 二七〇
披(ヒラク) 三六
飾レ非 三・三八七
鼎レ火 三九三
霹靂 三九九
嚬笑 三四五
嚬(ヒンス) 三四五
效顰 三四六
悲悲焉 三八三

フ

拊愛 三三四
布衣 三五・二四七・二六八・三九五
風雲 一七〇
風岸孤峭 三九五

風采 九三
夫子 九六・九八・二六六・二六五・二八七・二〇二・三二
風塵 二三六
青囊 二六三
風白 二四二
風白清美 二七五
風流 一八五
風流超軼 一八七
不穀 二五一
遂(フカシ) 一九九
不軌 一九八
不朽之盛事 一九七
幅巾杖屨 二二五
伏闕 三六一
布二腹心一 三五
覆篋 二五五
不肖 一〇九
巫匠 三四七

無狀 四七
拊循 三七二
婦人之仁 三
不孫 二〇九
扞(フセグ・マモル) 九〇・三六六
禦(フセグ) 二二・二五七・二八二・三九二
合二符節一 三六六
負戴 三二・二八五
不中 一三六
拂逆 七〇
拂亂 七九
物色 二三五
佛然 一九〇
敷晃 二
撫摩錬冶 三六六
復(フム) 三〇七・三〇八
陳(フルシ) 四〇三
賦斂 三九四
同レ符 一六三

分陰 三六八
待二文王一而後興 三九三
聞喜宴 三九八
忿疾之聲 一六八
不レ憤不レ啓 二六一
文質彬彬 九七
文章 一〇
文繡 三三
奮迅 三一六
紛々 三三五
塗浦 三四二
忿厲 八六

ヘ

病(ヘイ) 一四
兵革 三七〇
陛戟 一六三
法駕 二三五
法家拂士 三四五
弊袴 四〇三
閉塞 二三二

壁(ヘキス) 一六三
碧落 二二八
間(ヘダツ) 二三二
容(ベシ) 二六
偏安 二〇七
便佞 二九
蔑徵 二七〇
瞑死 一七〇
便辟 二九九
籩豆之事 二七〇

ホ

芒 二八四
鑾(ボウ) 二〇二
豐頤 二六三
方外 二七〇
法駕 二三五
法家拂士 二四五
法絹 一三五

蜂起 二六〇
沸湧(ホツケツ) 一三六
鮑魚之肆 八五
矛戟 二三三
祝言 八四
僧乎(ボウコ) 三七〇
寶鋼玉釵 二六六
亡國賤俘 三九一
暴虎馮河 一九九
蓬戶甕牖 八〇
封爵 二三一
苞苴(ハウショ) 二〇
放心 三六八
封人 八一
昨子 二〇五
媚諛 三八〇
暴疾 一九四
法術 三九八
亡 二二四
褒崇 二三一
寶祚 三五三
鮑賊 三五〇
榜中 七三
拋擲 三一六
乖レ方 三七〇
磅礴 七〇
貿貿焉 三三一
芒芒然 三二九
流ニ芳百世一 二〇七
暴慢 二四〇
方面之寄 七三
方略計數 四〇
暴厲迅疾 二一八
木鐸 八一
牧豎 一九〇・一六八
穆清 一七二
卜筮 二一九
朴直 二六三
牧伯 三三
墨墨 三五三
伐(ホコル) 三五〇
矜(ホコル) 一三八・三九〇・三九一・九一
恣(ホシイマヽ) 一七八・三三六・三三八
肆 三九五
從 一三五
放 一六
保障 三五
歩武堂々 三六六
粗(ホボ) 三八一
悖然 二一七
幾(ホトンド) 六〇・六五・三一三
涓(ホトリ) 三九
塹(ホル) 三四二
マ
賕(マヒナヒ) 三三
枉(マグ) 三三五
允 二九四
諒(マコト) 二二四
良 一三八
固 一九二
良有レ以也 一六・三七
多(マサニ) 二二五
祇(マサニ) 四〇五
方 一六一
愈(マサル) 二三八・三三
內レ交 二七
先從レ隗始 一〇五
爲(マナブ) 四四
爲(マネス) 二七・三八
間(ママ) 三七〇
戍(ママモル) 一八六
罕(マレ) 四一・三二四
罕(マレニ) 三二
萬全 二四五
滿目蕭然 六七

ミ
妙機 三三五
礪(ミガク) 三〇七
潤(ミダス) 一七四
誘 一二六
自殺 三八八
自率 三一
自暴 三二六
擧(ミナ) 一七五
明良相遇 一二六
瞻 三三三
殺レ身以成レ仁 一八一
擬身 三九五
立ニ民彝一
ム
攜(ムチウツ) 四〇一
睦(ムツム) 一七
無名之指 三八二
メ
冥合 三〇二
明主不レ掩ニ人之美一 五五
名節 一九〇・三九一
命世之才 三四〇
明窓淨几 六一
冥冥 三五〇
名門右族 二三五
明良 一七五
明良相遇 一二六
憐(メグム) 三七九
則(メグム) 四六
逮(メグル) 三四二
刮レ目 一一七
面折廷爭 七三
面從 三八〇
面從後言 三八一
モ
蒙塵 三一七
妄語 一一
木偶 一〇六
如(モシ) 一六四・二一九・三八二
假(モシ) 一三六
卽(モシ) 一七七・一八二
儻(モシ) 四七・一三九
以(モチフ) 二三
庸(モチフ) 二六九
尤(モツトモ) 三四八
將(モツ) 八一
原(モトヅク) 二六八
要(モトム) 二六七
干(モトム) 三九七
悖(モトル) 二三一
素(モトム) 三〇六
徵(モトム) 二四
要(モトム) 三七
素(モトヨリ) 三五
雅(モトヨリ) 三〇七・三九三
汝汝 一八八
ヤ
野 六
燎(ヤク) 二三三
慮レ約 三四
野史氏 二八
畜(ヤシナフ) 三一・三八一
宇(ヤシナフ) 二三六
瘦 八
疼 八
臘(ヤス) 九九
逸(ヤスラカニス) 三三
敵 三九二
敵組袍 三二
病革 二六

護疾両忌醫 三五八
已 二九〇・二九二
爲 二二四
行 二九九・二六八
差 三二四
稍 三二八
輟(ヤヤ) 三二六
輒(ヤヤモスレバ) 八九

ユ

勇悍趨捷 三六六
遊絆 一六三
熊虎之將 二五三
綱ニ繆關戶一 二一六
有司 二九・二五〇・二六五・二六五
有道 二九三
有德 二九八
雄辭閎辯 二一
熊掌 二〇五

ヨ

揖(イフス) 三五二
遊說 一八八
悠然 二七五
遊歐 二七七
云爾 三三二
悠々乎 三〇二
之(ユク) 一三〇・四〇一
適 八〇
征(ユク) 三九九
如 四〇〇
適 四〇一
受レ諫 二四一
聽 一八六
允(ユルス) 二九〇
釋 三二二・六七
庸醫 三二
傭畊 一八五
庸人 三五二
幼孩 一九二
雍熙 二六六
披ニ羊裘一 二五〇
庸君 二五二
庸夫愚婦 二五二
庸陋 二六八
夭 二七
夭絕 三二
燁然 二六二
雍滯 一六
依レ樣畫ニ葫蘆一 二四一
依レ樣畫レ餅 三二六
膺服 七
雍蔽 三六九
洋々乎 三〇二
翼贊 五
令(ヨクス) 一〇七
淑(ヨクス) 三六九
七棣 一八
鮮ニ克有レ終 四〇三
戚 三二
說(ヨロコバシ) 二六六・三三四・二二
涉レ世 三九

ラ

來賴 一六八
雷霆 二二八
磊落 三九
欒駕 三七
鸞旗 一九
欒輿 二二九
亂臣賊子 二七

リ

僚友 三六〇
流寓漂泊 四四
流落 三九

懷ニ抱利器一 四〇一
利器 九
六合 三三三
六經 三三七
六藝 四五
六尺之孤 二〇〇
六村 一〇〇
六朝 七二
犂牛 二四三
理到之言 三六一
李杜 三二二
東道 八九
鄉レ利倍レ義 三六〇
放ニ於利一 三二
陵夷 七〇
陵轢 一九八
良二千石 四〇三
閭 三六一
閭巷 一〇八
閭巷之人 二三四
閭左 一八六
凌侮 二五三・二六六
良巫之子 九二
諒 二五九
理亂 二〇八
廩稍之供 二四六
輪輻蓋軫 三六二
轔轔 三三九

ル

縷縷 二三二
累葉 二九四

レ

伶人 六九
令 三九
令德 二五二
令聞廣譽 三三
令名 三六八
禮俗 三七九
黎民 三三
珍瑰透徹 二六六
礪 二〇三
歷々可レ徵矣 三六七
列聖 三六・三三七
攀跪 二九二
傷レ廉 七四

ロ

螻蟻之穴 三三九
郎署 三九一
廊廟 二三二
隴上 一八五
殃 二六〇
隴畝 二九
雙鍾 二九二
遺 二九二
聾瘋 三六
老聃 三三
德絡 三三五
無レ施レ勞 九九二
鹿豕 三二三
泐(ロクス) 一九七
勒 一〇九
干レ祿 三九七
錄宿 六〇・一三三
露臺 一八五

ワ

吾儕 一〇八
和熙 二六八
爲(ワザ) 二三五
菑(ワザハヒ) 二五
殃 一〇五
栽(ワザハヒ) 一三五
孽(ワザハヒ) 三三七
遺 三六
謖(ワスル) 三六

語句索引終

きこゆたなしてゆうなし

大正十五年九月二十日印刷
大正十五年十月十日三版

（漢文解釋法）
定價 金壹圓八拾錢

著者 木村武一郎
發行兼印刷者 正文館 谷口守
印刷所 東京市麴町區飯田町六丁目一番地 合名會社 秀文社

發行所 東京市日本橋區大傳馬町二丁目二十一番地 淺見文林堂書店 電話濱花五九〇一番 振替東京一〇六〇番

著者檢印
不許複製

第四十參版

木村武一郎著

新訂受驗現代文解釋法

新訂版　四六判洋裝美本　四百五十頁　定價金壹圓八拾錢　送料金拾貳錢　特價金壹圓六拾錢

本書は現代文參考書の嚆矢として、好評嘖々、既に數十版を重ねたものである。過去數年間の入試問題中本書から出たものが數十編の多きに達してゐる。著者は創見と獨習、正確と親切、明晰と徹底とを標榜してゐる。本書が出版されて後、模倣品が續々出來た事から見ても、著者の識見の非凡な事がわかる。今回新訂版を發行するに當つて、特價を提供し、內容にも訂正を加へ、外形にも修飾を施した。因みに內容は、第一編解釋法、第二編解釋及大意、第三編重要なる書取語、第四編現代新語、索引等から出來てゐる。本書は解釋や大意についてのみでなく、實に書取の練習に絕好なる良書である。正確なる知識と實力を養ふ武器となるばか

發賣所　東京市日本橋區大傳馬町　淺見文林堂　電話浪花五九〇一番　振替東京一〇六〇番

323
711

終